

〈翻譯と註解〉

## ディオゲネス・ラエルティオス第10巻（二）

——エピクロスの巻——

渡 邊 雅 弘・譯

（承前）

- 6        ロス(5)で、その『反エピクロス論』第四巻にこの記事がある。| そのほか、絃妓どもには艶文がばら撒かれ、なかでも三日にあげずの熱の入れやうだつた相手が（既に述べた絃妓）レオンティオン。（腹心の）メートロドーロスといふ（勝手知つたる手強い）戀敵がゐたせいだが、因みに自著『生き方の中心と成熟』でエピクロスはかう嘯いてゐる。「といふのも、吾輩にすれば、かういふ楽しみ以外にこの先何と何を價千金の福とすればよいのか、皆目わからないからだ。食ひ道樂を斷つ一方で、色事に蕩けるのも駄目、酒盛り中の餘興の耳慰みも不可、美形を愛でる目の保養、眼福すら罷りならぬとすれば」と。(1)また、(先述の若盛りの美青年) ピュトクレースに宛てた附け文でもかう認めてゐる。「<sup>うぶな</sup>初心なネンネは卒業ですぞ、さあ御身よ、舟出だ、御身の可愛い帆柱がピンと立つたからには」(2)。(ストア派の) エピクテートスは猥談狂とエピクロス<sup>オピクロス</sup>を論ひ、謗つて痛罵したのも領ける。(3)さらなる罵詈雑言を浴びせたのがティモクラテースで、(4)この御仁、『人の愉樂あれこれ』と題する數巻本で（エピクロスを次のやうに）扱き下ろしてゐる。この（腹心）メートロドーロスの兄弟でエピクロスの（ラムプサコス時代の）弟子だつた男も、かつては師説に魅了されたのだつたが。(5)「エピクロスは<sup>に</sup>食をとともに嘔吐した、贅澤三昧の酒食がたたつて」とばらす一方で、見届けた顛末を詳言し、ことにやつとのことでそれから逐電しおせたと
- 7        いふ、エピクロスが夜分頻繁に行つた奇怪な心術指南(6)と、得體が知れずいかがはしい社中同居の内輪をかう素破抜いたのだ。| 「エピクロス

奴は（指南などと稱しながら）術理の辨へもあらばこそその頓珍漢で、衣食の方ではそれに輪をかけた白痴の體だつた。目も當てられないデブで、長年（移動の手だてに用ゐた）<sup>かこ</sup>轎から體を起こすこともできない爲體であつて、(1)大枚一ムナも弾んで日毎の食卓を賄てゐた。この賄ひ自慢の件はエピクロス奴が手づから（絃妓）レオンティオン宛の痴話文に幾度も綴り、（小アジアはレスボス島の）ミュテレーニ在住の心術の同行たち一同に宛てた私信にも一度見えてゐる。(2)なほかうしたエピクロス奴のはたまた（その腹心でわが實兄）メートロドーロスの（ヒモ同然の、衣食を支へて）同棲してゐたのが、レオンティオンとは別の絃妓どもで、マムマリオン、ヘーデア、エローティオン、ニキディオンだつた。(3)それに（夜の奇怪な指南の種本だつた）全三十七巻本の『心現象論』はもとより〔九分九厘〕(4)（他人の痛罵といふ）無藝一色だし、エピクロス奴は同書で論敵どもに筆誅を加へる一方で、就中（舊師だといふ原子論者）ナウシファネス(5)には集中砲火を浴びせ、當の一節でかう罵つて憚らない。『それでは聯中のお手並み拜見と參らうか。その名を口にするのも汚らばしい彼奴（ナウシファネス）は同じ穴の貉どもと十把一絡げの下賤の輩で、舌先三寸で飛ばす與太話に天狗になる（、泡銭稼ぎの）駄法螺術を編み出さうと躍起になつてゐたゆゑ。』これでも溜飲の下がらないエピクロス奴は方々への私信でもナウシファネスを仇にしてさらにか

8

う踏みつけてゐる。『それで彼奴は逆上し、吾輩を的に毒づいて“ほやきの壁訴訟”と當てつけたのだ。』| 確かに“水母（<sup>くらげ</sup>鈍感な盆暗）”(1)とエピクロス奴は常々ナウシファネスを貶めて、“目に一丁字もない明き盲”とも“べてん師”とも“男娼（男パン助）”とも扱き下ろしてゐた。因みに他（の論敵ども）にも惡態が放たれたが、プラトーン一派は“（シュラクサの）僭主ディオニュシオスの太鼓持ち”で、(2)プラトーン當人は“（鍍金箔さながらに凝つた文飾が）ご立派すぎて”。(3)アリストテレースは“極道”。〈この與太郎は〉親譲りの身代を蕩盡した擧げ句、（これはマケドニア宮廷の御典醫だつた父親譲りか、藪醫者もどきの）千三つ

で藥を賣捌い（て荒稼ぎし）たいかさま渡世ゆゑのこと。(4)“(他處で仕入れた知識を方々で賣り歩く)行商人”とは、(ソフィストの)プロタゴラス。此奴は“デーモクリトスの引き寫し”で、行く先々の村で顧客に(デーモクリトスの言葉を數多筆耕した)巻本をネタに切り賣り講釋をした。(5)ヘーラクレイトスは“事を構へる搖さ振り屋”。(6)デーモクリトスにいたつては“珠玉の<sup>たはごと</sup>諺言”。(7)(エピクロスに造反した)アンティドーロスは“根つからの口三味線”。(8)(天文・自然占星術の)キュジコス派は“希臘の仇敵”。(9)そして(メガラの)問答派は“救ひ難い鼻摘み”。(10)一方、(懷疑派の祖)ピュローンは“無知無學無教養の捻くれ者”(11)だと。|

- 9       しかし惡意に憑かれて氣が觸れてゐるのだ、この(エピクロスを誹謗中傷した)聯中は。(1)といふのも、この巨壁(エピクロス)にはむしろ逆の證しの方がふんだんにあつて、エピクロスは搖るぎない敬慕的になつたといふ點で比類を絶する人だつたからである。父祖の社禩(アテーナイ)は青銅の胸像を建て禮を以て報いたし、(2)知音の數は夥しくポリスといふポリスに遍く數へ切れないほどで、とくに(エピクロスの許に同居した)社中はみな(死の影の濃い)セイレーンの呼び聲のやうなその數々の術理に魅了され心が溶けた人々だつた。(3)ただ、その中で(イオーニア地方は)ストラトニケイア者のメートロドーロスだけは例外で、この者が(新アカデーメイア派の)カルネアデース(4)の許へと走つたのは、多分エピクロスに敵する者のない心酔、歸依する者の門前市をなす賑ひに、むしろ閉口したからであらう。それでエピクロスの衣鉢は他の學統がほぼすべて途絶へた後も聯綿と相承され、數知れぬ棟梁が引きも切らず社中から輩出した。(5)|その一方で、エピクロスは二親への感恩の念も厚く、ことに兄弟たちの(心術修養の)世話にも心を砕くとともに、(1)家僕どもの心をも耕してその蒙を啓いた。この件は(後述する)エピクロスの遺言などにも明らかで、家僕どもまでもがその指南の下に心術の修養に勤しんだわけで、就中一頭地を抜くと衆目の一致してゐたのが前述の家僕ミュスだつた。(2)(このやうに)あらゆる點でエピクロスの
- 10

- 懐の深い（私心私慾にぶれない）無私の俠氣<sup>おとこぎ</sup>は比類のないものだつた。だから、その（國家鎮護の）神々を畏れ敬ふ心映へや、父祖の社禩（アテーナイ）を思ふ愛國の至情が筆舌に盡し難いものだつたのも尤もなこと。さもなければ、エピクロスは（一自由市民としてアテーナイに）移り住んで身を立てやうとはしなかつただらうが、まったく以て然も有りな人と思はれる。(3)だから、當時（マケドニアの侵攻、ヘレニズム諸王の覇権争ひに伴ふ動亂でアテーナイを含む）北方希臘が常在戦場の修羅の巷と化したにもかかはらず、その地（アテーナイ）にとどまつて（非業の死にも見舞はれず、）エピクロスは一期を終へて往生を遂げたわけだし、旅をしたのはまれで、ほんの二、三度、それも（海路）イオーニア地方へ渡り（ミュティレーネ、ラムプサコスなどを）周游して知音たちの許を駆け足で訪ねたにすぎない。(4)そこで知音たちの方が（希臘世界の）四方八方から（命の危険も顧みず）エピクロスの許に蟄集し、（在アテーナイの）静塾園を根城としてこの人とともに暮らすやうになつてゐた。この社中同居の経緯を傳へたのはアポッロドーロス(5)で、その記事によると【静塾園は大枚八十ムナを投じてエピクロスが購つたもの。しかし、（マケドニアの人）ディオクレースの『（哲學者）便覧』第三巻によれば、】(1)一切無駄遣ひをせず、贅を削ぎ落として極限まで簡素化した（無慾恬澹な）暮らしをこの社中一統は（ともに齒<sup>くは</sup>しつつ）營んでゐた。(2)「例へば、」ディオクレースによると、「小甕ひとつ分（約1/5リットル）の（水で割つた）薄い葡萄酒すらこの一統は斥けたが、それは、一統が飲料は水だけとすることに徹してゐたからだつた。(3)さりとて、エピクロスは一統各々に（さうした）暮らしぶりの劃一化を求めたわけではなく、ピュタゴラス流の所謂“友のものはおれ〔みな〕のもの”といふ（利己心と惡平等の）手口を斷固斥けた。といふのも、（社中の）名ばかりで心ここにはない聯中にはかうした劃一的な規律も意味はあらうが、もとよりそれは（衣食足らないからこそ、氣高く廉潔に生きるといふ、己に忠實な）生き方の美學をもつ社中のすることでない以上、（エピクロスの）知音たちの

すべきことでもないからである。」(4)それで、エピクロスは私信で幾度もかう告げてゐる。「(飲み物は)水だけでわたしは結構、(食べ物も)粗末な麴麴<sup>パン</sup>一塊りで事足ります。」(5)さうかと思へば、こんな(お國訛りのイオーニア方言混じりで知音に宛てた無心の)一節も。「御身よ、乾酪<sup>チーズ</sup>をおねだりしたいのです。誰かに持たせて寄越してくれませんか、小壺ひとつ分。それがあれば、心が動く時いつでも豪勢な御馳走に與ることができますので。」(6)かうした(無慾恬澹で、求めず、なにものにも煩はされない自由を生きる)はぐれ雲だつたのだ、(後述する)「心が澄んで動じない自在への成熟が生き方の鑰」(7)と(癒しの)術理を道破したこの人は。その人徳をアテーナイオスもまた(イオーニア方言の)寸鐵詩でかう稱へてゐる。(8) |

## 註解

### (承前)

6(1) Cf. Athena.vii.278F.「我輩(エピクロス)としては、うまいものを食う楽しみ、性交の快樂を抜きにしては、善を考えることはでき申さぬ」、あるいはxii. 280B.「私(エピクロス)としては、味覚による楽しみとは別に、性交から得られる快樂とは別に、目に映る形の動きの楽しみとは別に、善なるものを考えることはできない」(柳沼重剛訳)とある。Cf. Cic. *Tusc. Disp.* iii.41. (Usener69, Arrighetti [22]) しかし、ディオゲネス・ラエルティオスが直接依據してゐるのは、かうしたアテーナイオスの簡略化された原典ではなく Athena.xii.546E. (Usener67, Arrighetti [22]) と推測される。その原文は「私(エピクロス)としては、味覚から得られる快樂、性交から得られる快樂、聴覚から得られる快樂、視覚によって、ある形の動きから得られる快樂、こういうものを排除したところに善なるものを考えることはできない」(柳沼訳)と邦譯されてゐる。ただ、この「視覚によって、ある形の動きから得られる快樂」と譯

された原文は  $\tau\acute{\alpha}\varsigma\delta\iota\acute{\alpha}\mu\omicron\rho\phi\eta\varsigma\kappa\alpha\tau'\acute{\omicron}\psi\iota\nu\eta\delta\epsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$   
 $\kappa\iota\nu\eta\sigma\epsilon\iota\varsigma$  で、ディオゲネス・ラエルティオスは何故か  $\tau\alpha\varsigma$   
 $\delta\iota\alpha\mu\omicron\rho\phi\eta\varsigma$  ( $\eta\delta\omicron\nu\acute{\alpha}\varsigma$ ) のみに省略してゐる。前者は「美形  
 を（観て）愛でること沸き上がる眼福」といふほどの意味であらうか  
 ら、省略された正文と殆ど意味の差はないやうに思はれる。従来この  
 $\mu\omicron\rho\phi\eta$  の語が専ら「造形芸術品（繪畫、彫塑、彫刻、鑄造物）」の意  
 に解されたと指摘してそれに異を唱へ、R.D.Hicks はむしろ文意の全體  
 が味覺、觸覺、聽覺、視覺の四感覺を介した快樂の典型が列擧されてゐ  
 ると主張して、そこに五感をなす嗅覺が含まれないのを怪しむと註記し  
 てゐる。（*Diogenes Laertius*, vol.2, pp.534-5）ともあれ、この本文では  
 エピクロスに對する罵詈雑言として、エピクロスがアリストIPPUS  
 （キュレネ派）の「快」の増殖を肯定する過激な快樂説の系譜に屬する  
 と非難されてゐるわけである。その極致は「強者の正義」を唱道したカ  
 ッリクレースの「快樂の奴隸」説と言へやう。Cf. *Plat. Gorg.* 493B, 494B.  
 なほ、註4(7)、參照。

言ふまでもないことであるが、英單語 pleasure（快樂、快適）や flake  
 （魚干に使ふ平棚）の語源がラテン語 placeo, placere からギリシア語  $\pi\lambda\acute{\alpha}-$   
 $\xi$ （平らかなもの、平坦、平地、平原、臺地、海原、平穩等）にまで遡る  
 とすれば、エピクロスの「快樂（ $\eta\delta\omicron\nu\eta$ ）」の本意は容易にイメー  
 ジ化されるであらう。それが「心の靜謐（ $\acute{\alpha}\tau\acute{\alpha}\rho\alpha\epsilon\iota\alpha=\acute{\alpha}-\tau\acute{\alpha}$   
 $\rho\alpha\epsilon\iota\varsigma$  心の亂れない平らかな状態、なにものにも煩はされない自由  
 （悦び）の境地）」とも、「心の風（ $\pi\epsilon\rho\acute{\iota}\omicron\delta\omicron\nu\tau\acute{\omega}\nu\kappa\upsilon\rho\iota-$   
 $\omega\tau\alpha\tau\acute{\omega}\nu\pi\rho\acute{\omicron}\varsigma\gamma\alpha\lambda\eta\nu\iota\sigma\mu\acute{\omicron}\nu$ . D.L.x.83 [Ep. adv. Hdt. 83]）。  
 Democritus の“心の風 [  $\gamma\alpha\lambda\eta\nu\acute{\omicron}\varsigma$ . D.L.ix.45 ]”を初めとする、  
 $\gamma\alpha\lambda\eta\nu\iota\acute{\alpha}\nu$ 、 $\gamma\alpha\lambda\eta\nu\acute{\iota}\xi\epsilon\iota\nu$  の夥しい用例については、  
 Usener, *Glossarium Epicureum*, S.151-152.)」とも等置されるのは、當然  
 と言へやう。エピクロスの“ $\eta\delta\omicron\nu\eta$ ”は「心の嵐（ $\pi\acute{\alpha}\varsigma\acute{\omicron}\tau\eta\varsigma$   
 $\psi\upsilon\chi\eta\varsigma\chi\epsilon\iota\mu\acute{\omega}\nu$ ）」と對置され、それを克服した「心が澄んで

動じない自在（悦び）の境地」を謂ふ。

- (2) Παιδείαν δὲ πᾶσαν, . . . , φεύγει は「すべての教養をのがれて」と譯するのが一般である。C・Baileyは、「エピクロスは（自派が）他のどんな哲學諸派の傘下にもなく自立した一統であることを主張してゐたが、ここではむしろ詩學、音樂、『（舊來の自由）市民の教養』といった、アテナイ人の萬年教養からの離脱を恐らく言明してゐる」と推測し（C・Bailey, *Epicurus*, p.405）、この舊來の「教養」に對してヘレニズム時代に臺頭する個人主義の新たな關係にこだわる解釋が、古代以來の傳承を根據に一般に受容されて來た。直接ピュトクレスが名指しされる「教養」の文例は、Plut. *adv. Ep. Beat.* 1094D (Usener163) “Πυθοκλέους . . . , ὅπως οὐ ζηλώσει τὴν ἐλευθέραν καλουμένην παιδείαν (ピュトクレスが所謂自由市民に相應しい教養を學ぶのに大車輪にならないやうに)” である。他に、ピュトクレスが名指しされない場合の記事には、Plut. *de poet. audie.* 15D (Usener164) “ἐν ἀγκάζωμεν αὐτοὺς τὸ Ἐπικούρειον ἀκάρτιον ἀραμένους ποιητικὴν (詩術) φεύγειν”、Plut. *adv. Ep. Beat.* 1094D (Usener163) “ἀλλὰ τοὺς μὲν ἐπαραμένους τὰ ἀκάρτια φεύγειν ἀπ’ αὐτῶν κελεύουσιν”、Quintilianus, *insit.* xii. 2.24 (Usener163) “(Epicurus) fugere omnem disciplinam nauigatione quam uelocissima iubet.” がある。かうした文例では文脈上、(時代の主流であるプラトーン系の)「學問」あるひは「教養」からの「離脱（いづれも“船出”のイメージ)」を読むのが當然であらうが、政治的な公民哲學を身上とするプラトニストにして、反エピクロス主義のプルータルコスや、紀元後のクインテリアヌス（35年頃-95年頃）の言明そのもののにどの程度の信憑性があるのか。一方、Athena. xiii. 588A (Usener117, Arri ghetti [43], Bailey. Fr. 24) 「わたしは御身を祝福するよ、アペッレス君、純粹

學問 ( $\pi\acute{\alpha}\sigma\eta\varsigma\ \pi\alpha\iota\delta\epsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$ . 數學?) なんぞに囚はれず、御身はわが『哲學』に従つて生きるやうになつたのだから。」( $\hat{\omega}\ \text{A}\pi\epsilon\lambda\lambda\eta$ ) は Plut. ad. Ep. Beat. 1094D [Usener117] から補訂されたもの。 $\pi\alpha\iota\delta\epsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$  に替へて、 $\alpha\iota\kappa\acute{\iota}\alpha\varsigma$  [(不當な恥すべき行ひ) Bignone]、 $\alpha\iota\tau\acute{\iota}\alpha\varsigma$  [(非難さるべきこと) libri] を読む呈示があるが、採らない) がある。ここで言はれる「學問」あるひは「教養」が、やはり「數學」中心の想定であるらしいことについては、同じく Plut. adv. Ep. Beat. 1094D (Usener117) の一節、参照。「(エピクロスの一統は) アペッレスのごときを激賞し溺愛して、かう書いてゐる。『アペッレス君は初めから(數學系の) 諸「學問」には手を染めず、それを<sup>かわ</sup>躲して自分が足許を拘はれないやうに周到に用心してゐた』と。」

しかし、かうした背景を踏まへながらも、拙譯では底本の  $\pi\alpha\iota\delta\epsilon\acute{\iota}\alpha$  を「學問」でも「教養」でもなく、ストア派のエピクテートスがエピクロスを「猥談狂」と罵倒したといふ文脈に合はせて、「(十八歳未満の) 少年時代」の意と讀む。なほ、 $\tau\acute{\alpha}\kappa\acute{\alpha}\tau\iota\omicron\nu\ \acute{\alpha}\rho\acute{\alpha}\mu\epsilon\nu\text{-}\omicron\varsigma$  「御身の可愛い帆柱がピンと立つたからには」の本文には寫本上の異同が多々あるが、ここは Gassandi の補訂を讀む。註 5(3)、参照。

- (3) Epicutet. Diss. III. 24. 38 では  $\kappa\acute{\iota}\nu\alpha\iota\delta\omicron\varsigma$  (道樂者、放蕩者) の語で、エピクロス個人でなく、エピクロス社中が非難されてゐる。ストア派には、ありうる非難であらう。しかし、ディオゲネス・ラエルティオスのこの本文では、 $\kappa\iota\nu\alpha\iota\delta\omicron\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$  (猥談狂) の語が使はれてゐる。語を微妙に變へたディオゲネス・ラエルティオスにどんな意圖があつたのかは、不明。エピクロス個人も、エピクロス社中も、事實として「道樂者、放蕩者」ではなかつたと辯護したいのか、どうか。

- (4) ティモクラテースについては、註 4(9)、参照。

- (5)  $\tau\eta\varsigma\ \sigma\chi\omicron\lambda\eta\varsigma\ \epsilon\kappa\phi\omicron\iota\tau\acute{\eta}\sigma\alpha\varsigma$ . 諸家の讀みはいづれも  $\sigma\chi\omicron\lambda\eta$  を直譯の「學派」と解して、概ね「(エピクロスの) 學派を去つた後で」の譯で一致してほぼ例外がないやうに思はれる。しかし、拙譯で



は敢へて  $\sigma\chi\omicron\lambda\hat{\eta}$  をディオゲネス・ラエルティオスの語法に従つて、「エピクロスの所説」の意と解してゐる。註2(3)、参照。なほ、 $\tau\hat{\eta}s$   $\sigma\chi\omicron\lambda\hat{\eta}s$  が對格形でなく、屬格形であるため、アオリスト分詞の  $\epsilon\kappa\phi\omicron\iota\tau\hat{\eta}\sigma\alpha s$  は「(學派を) 去つた後で」でも、「背教した後で」でも、「(秘説を) 廣めた」(D.L.5 [師説の喧傳]) でもなく、「かつて(師説に) 魅せられた」の意と解する。

- (6) 「エピクロスが夜分頻繁に行つた奇怪な心術指南」。造反組のティモクラテースが醜聞を暴露する文脈で語られてゐる。一日の始まりは、ユダヤとギリシアでは日没起算(日没から日没までの24時間を一日として、ギリシアでは日時計や夜間に水時計が使用された)、古代エジプトとローマでは真夜中起算が、行政・法律上の勘定法であつたが、ギリシアにはもう一つ、「自然の日」(日の出から日没までの12時間を一日とする)の數へ方があつた。恐らくこのエピクロスの「夜會」は、「自然の日」に言ふ日没後の「夜」(この夜は晝の餘りもの)に催された「修養會」のことと思はれる。醜聞を差し引いて考へれば、舗装された歩道も人道もなく、その街路には夜間の燈火の備へもなく、月夜以外は松明等を携行するほかなかつたアテーナイで、エピクロスの一統は安全な「庭園」の家屋で、「水と麴麴」の正餐を攝つた後、乏しい燈りの下で頻繁に夜の「修養會」を勵行してゐたのではなかつたか。これは「晝は俗にして夜は雅なり」といふ風雅のごとき趣向ではなかつたと思はれる。ローマ人とは事情が異なつて、古代ギリシアでは「食(食事)」と「飲(酒盛り、饗宴)」が分離してゐて、食べつつ飲み、飲みつつ食べる慣習がなく、客人を招いての食事後に食卓が片付けられて、食事には招かれなかつた客人の合流も多かつた酒宴が用意された。エピクロス一統の「修養會」は、「小甕分の薄い葡萄酒すら退け・・・飲料は水だけとすることに徹してゐた」(D.L.x.11) 一統の酒盛りなしの「饗宴」として催されたのではないか。プラトーンやクセノフォンの『饗宴』の談論風發する問答とは異なるが、自分の巻本の「暗誦」を社中に鍛鍊するといふエ

ピクロス流の「饗宴」の手法が、ティモクラテースによつて醜聞化されたのではないか。

この点では、反マケドニア運動でアテナイ市民からの信望が厚かつた雄辯家・政治家デーモステネースと、反りの合はないその政敵、あるいは個人的角逐の敵手として市民からも敬遠されたヒュペレイデース（イソクラテースの弟子、私訴裁判の辯論代理者）との対比も参考にならう。口汚い食ひ道楽で博打狂ひといふ、極道さながらの蟒蛇の遊治郎、一代の蕩兒とも言ふべきヒュペレイデースに對して、デーモステネースは質實剛健の石部金吉金兜、素面で「水ばかりを飲み、夜思索する（一人で修練する?）」人物だつたといふ。（Athena.44F）

- 7(1) Suid. 《Ἐπίκορος》、註3(3)、10(1)参照。ブルータルコスは、エピクロスの病名を「水腫（浮腫）」（皮下組織の空隙や腹・胸腔に大量の水が貯まつて膨れる病氣）と名指してゐるが（Plut.adv.Ep. Beat.1097E [Usener186,190]）、眞偽不明。ヒボクラテースは、水の健康に及ぼす影響を重視し「水腫」をかう觀察してゐる。「水腫がひじょうに多く、これは命にかかわること大である。すなわち夏には赤痢多くおこり、また下痢と長期の四日熱がおこる。これらの病氣は、もし長びけば・・・水腫をおこさせ、死にいたらせる。これらは夏におこる。」（ヒボクラテス「空氣、水、場所について」、『古い医術について』小川政恭訳、岩波文庫、1985年、13-14頁。）エピクロスの兄弟たちも揃つて「水腫（浮腫）」で死亡したらしいが、他に「尿石による尿閉（排尿困難）」、「疫痢（赤痢）」、「肺結核」の病名も挙げられてゐる。（Plut.ibid. 1089EF.Senec.Ep.66.47 [Usener138] ,Cf.D.L.x.15,22）エピクロス自身については、生誕の年と月（第一〇九回オリュンピア大會期の第三年目 [前三四二／一年]、ソーシゲネスがアルコーンの年のガメーリオン月 [アッティカ歴七月、太陽暦一月末から二月上旬] の七日。D.L.x.14）は挙げられてゐるのに、病歿の方は年（第一二七回オリュンピア大會期の第二年目 [前二七一／〇年]、プタトスがアルコーンの年のこと。

D.L.x.14) が知られても月が分からないので、ヒポクラテースの言葉どおりの夏期の病歿か否かが判然としない。況や、かうした生活不如意の病氣が、なぜエピクロスの「三百巻に垂んとする」(D.L.x.26) 空前の著作活動の妨げにならなかつたのかも、不明。Aelian, Fr.39 (de Epicuro eiusque discipulis, Usener218,S.168) は皮肉なつぷりに、贅澤三昧の達人エピクロスであればこそ、父母、兄弟たち、メートロドーロス、ポリュアイノスといった親近死者たち以上の、そして常人に倍する自分の墓前への手向けを、達人の特権として手配してから死んだと、述べてゐる。エピクロスの遺言狀にそのやうな指定はないのだが。Cf.D.L.x.18.

- (2)Cf. D.L.x.10 「(エピクロスは「後繼者戦争」の渦中に、) ほんの二、三度、それも(海路)イオーニア地方へ渡り(ミュティレーネ、ラムプサコスなどを)周遊して知音たちの許を駆け足で訪ねた。」その巡歴の折り(D.L.x.10)の、ラムプサコス到着の一報と思はれる、「ある少年か少女に宛てたお手紙」(偽造の疑ひあり)や、乾酪を「おねだり」(D.L.x.11)する手翰が残されてゐる。この「ほんの二、三度」の歴訪は、在ラムプサコスのイドメネウスやレオンテウスを中心とする、年毎の「分擔金(σύνταξις.120ドラクマ=1.2ムナ=36萬円弱?)を負擔する遠隔地のパトロン、関係者、知音各人たちとの交渉が目的だつたのではないか。註4(8)、参照。

- (3)Cf. Arrighetti, *Epicuro*, n. [101], p.458.n. σὺν ἐπινοίᾳ . . . Νικιτίδου “non huc pertinere videntur” (Diano) この動詞 σὺν ἐπινοίᾳ の不定形を諸家が譯すやうに、「性交」の意と解せば、この一句は文脈上浮いてしまい、Dianoの註記も首肯しうるが、「(生活を支へる)同居、同棲」と取ればよいのではないか。Dianoの註記の背景には、エピクロスの「快樂」主義を、性の問題に絡ませて執拗に非難する傾向がストア派以來の傳承として根強くある。他にも、D.L.x.118のエピクロス及びエピクロス社中の達人觀が語られる件で、「性交(σύνου-

σ ι ή、イオーニア方言)は、いかなる場合にも決して人を益したことはない」(加来訳)と諸家の譯す一節があるが、このσ υ ν ο υ σ ι ήは「(「求め過ぎる」慾に馮れた)何かにとらはれた不自由」を意味するやうに思はれる。なほ、逆にむしろ「性問題(猥談狂)」に關はらせて讀むべき場合については、前註6(2)、(3)、参照。

(4) [τ ᾶ π λ ε ί σ τ α] (Diano) の補訂を讀む。

(5) テオスのナウシファネス(前360年頃生誕?)は、アレクサンドロス王の東征軍に共に従軍したエリスの「引つ掻き回しの(ᾶ ν α σ τ ρ ο φ ῆ́)」懷疑論者ピュローンにも學んだらしいが、れつきとしたデーモクリトス正統の系譜に聯なる原子論者。テオスは小アジアはコロフォーン北西岸、サモス島から遠からぬ眞北に位置する都市で、前324/23年に少年エピクロスが(ヘーシオドスのカオス評釋の一件後、?) サモスから參じて師事したとされるナウシファネスは、前323年にその民主政が終焉する頃のアテーナイにエピクロスを帶同して出向いて講釋をしつつ、キオスのメートロドロースから修辭術を修得したといふが、正確なことは分らない。ナウシファネスは、デーモクリトス流原子論者としてエピクロスにその自然學と認識論、數學系の知識を傳授したとしても、文化論・倫理面では「哲學者」の修辭術の鍊磨と動亂と抗爭の渦卷く國事への積極的關與を主張した點では、デーモクリトスともエピクロスとも劃然と異なる。民主政下では修辭の辯論術は政治(統治)術の中核をなし、ことに大衆煽動政治家には不可缺の伎倆だつたので、ナウシファネスはむしろソフィストや辯論家、そして後年、哲學を「家や國家を立派に治める學」(Antid.281.廣川洋一『イソクラテスの修辭學校』、岩波書店、1984年、V章)として、空理空論の机上の嚴密を拒み、學問の實用性を重んじたイーソクラテースの立場に近かつたのではないか。cf.R.E.,art.《Nausiphanes》(Kurz von Fritz)

(6) 底本のδ ι δ ᾶ́ σ κ α λ ο ν (教師)でなく、Usenerの補訂δ ῶ σ κ α λ ο ν (厄介者)を讀む。

8(1)N.W.DeWittは、 $\pi \lambda \epsilon \acute{\upsilon} \mu \omega \nu$ 「肺魚（原始魚）」が「軟體動物」（mollisc）や「水母」（jelly-fish）と誤譯されて來たと指摘してゐるが（*Epicurus*, p.62）、本ディオゲネス・ラエルティオスの文脈や他の古代諸文献によると、「水母」と解して支障ないやうに思はれる。確かにHicks、Laks、Kochalsky、加来彰俊は「水母」（jelly-fish、méduse、Qualle）、Arrighetti、Parente、Sammartano、Kochalsky、Bailey、曉烏武雄、出隆・岩崎允胤は「（鮎、烏賊、貝類といった）軟體動物」（mollusco、mollisc、cf.Baily,Fr.22）と譯してゐる。Apeltの譯語“Meerlunge”は「水母」か「（鰐に当たる器官が肺構造をしてゐる）肺魚（原始魚）」か判然としないが、Pliniusの“pulmones（水母）”を直譯したのではないか。 $\pi \lambda \epsilon \acute{\upsilon} \mu \omega \nu$ が「水母」ならば、日本語では「背骨（氣骨）のない、（螢光を放つつ漂ふ）掴み所のない」生き物を意味するが、やはりPliniusに依據するやうに思はれるUsenerは $\pi \lambda \epsilon \acute{\upsilon} \mu \omega \nu$ を“pulmo marinus（水母）[il pulomone marino, Arrighetti,n.[103] p.681]”、つまり「愚鈍の藝なし」を言ふのにぴつたりの比喩と解してゐる。（Usener,*Glossarium Epicureum*, 1977, S.547-48）同じくApeltも“Meerlunge”を「愚鈍の木偶の坊」の比喩としてゐる。（*Diogenes Laertius:X Buch; Epikur*,1968, S.130, Anm.23）一方、Hicksは「人のいひなりになる木偶の坊」ではなく、「鈍感（無感覺）な盆暗」と取つてゐる。（*Diogenes Laertius*,vol.2, p.536）古代諸文献に言ふ“ $\pi \lambda \epsilon \acute{\upsilon} \mu \omega \nu$ ”や“pulmones”（複數形）、すなはち「水母」は「（蛇、牡蠣と同じく）關節のない生き物」（*Athena*.viii.354A）の例として挙げられるが、概括すると、「微かな螢光を放つ無感覺な海生動物で、人間のやうな五感に彩られた生を生きるものでなく、その運動が人の肺呼吸伸縮に似てゐるもの」である。敷衍すれば、背骨なく、薄志弱行、行方定めずひたすら浮遊と食餌に明け暮らす融通無碍、といふやうにイメージ化することができやう。Plat.*Philb*.21C（*Athena*.iii.97Cに引用）、Arist.*de Par.Anima*. 681A 19、Sext.*Emp.adv.Math*.i.3-4（Usener114、

Arrighetii [103])、Plin. *Nat.His.*xxxii.52, ix..154、Hesychius. v. π ν ε -  
ὕ μ α ο υ ρ ι ο ν iii, 348,43等。因みに、Bignoneは「どう言つても、  
結局は ἄ γ ρ ᾠ μ μ α τ ο ς (目に一丁字もない) と同義になる」  
(*Epicuro*,p.199.n.2) と述べてゐる。

Sext.Emp. *adv.Math.* i.3- 4 (Usener114, Bailey,.Fr.22,Arrighetii [103])  
「さて、エピクロスはこの男(ナウシファネス)の弟子だつたが、獨學  
獨修の者であり、生まれながらの哲學者と見られることに腐心し、この  
自分の評判が決して地に墮ちないやうに懸命に努めて萬策を講じるとと  
もに、あの男(ナウシファネス)が大家ぶつて幅をきかせてゐた斯道  
(原子論、政治術、修辭術?)に難癖もつけたのだつた。それでミュティ  
レーネー在の哲學同行どもに宛てた手翰でかう述べてゐる。『わたしが  
強いと思ふのは、鬱陶しい論敵どものことだ。聯中は、わたしがこの  
「水母」の弟子で、「水母」に心酔する青二才ども數人とその講筵に聯な  
つたと、思つてゐるらしい。』かうしてエピクロスはナウシファネスを  
「愚鈍(無感覺 ἀ ν α ῖ σ θ η τ ο ν)」と呼んだのだ。そして<更に>  
過激にこの男に多くの非を鳴らしながら、進境著しい自分の學問をひけ  
らかして、かう嘯いてゐる。『といふのも、此奴こそ碌でもない役立た  
ずで、他愛もない瓦石の講釋を生業としたからだが、そんな高の知れた  
子供騙しで人が叡智をわがものにしうるわけがないのだ』と。しかし、  
その自分の學問とやらが何かははつきりと語らない。」「鬱陶しい論敵ど  
も」についてはPlut.*adv.Ep.Beet.*1086E (Usener237,Plut.  
*adv.Colot.*1124C)、参照。エピクロス及びエピクロス社中が先に他の  
「名うての哲學者たち」に「嫉妬に驅られて」「世人の使ふ酷い辱めの言  
葉」を投げつけたことが、手強ひ論敵を作つたといふ見方である。「野  
卑、見かけ倒しの駄辯、山師の巧言、尻輕、殺し屋、胴間声のがなり、  
迷惑千萬、薄鈍の木偶の坊」などの言葉を掻き集めて浴びせかけたとい  
ふのである。一方、エピクロスのミュティレーネー在住の知音たちに宛  
てた手翰は本セクストス・エンペリコスの擧げた一本をも含めて、ἐ π -

ιστολὴ περὶ ἐπιτηδεύματων (仕事といふものを論じた手翰。Athena.viii.354B (Usener171,172、Arrighetti [101,102,103]) と稱される。ただし全體を偽作と見る向きもある。Vgl.W.Crönert,*Kolotes und Menedemos*, S.22.

- (2)プラトーンのシケリア渡航は三度あつたといふ。その三度目にシュラサイの僭主ディオニーシユオス2世に招かれ、この暴君を「哲人王」に仕立てて政治改革を志し、最終的に失敗したプラトーンと盟友の廷臣ディオーンの活動の経緯とその詳細については、*Plat.Ep.VII*, D.L.iii.18-23、参照。最初のエトナ山の噴火口見物の後、二度目の渡航の折り、同王の父ディオニーシユオス1世に強ひられた不本意な交際の渦中で軋轢が生じ、プラトーンが奴隷に賣られ、キュレネの人アンニケリスが20あるひは30ムナの身代金で買ひ戻したといふ傳説がある。アンニケリスはプラトーンの友人たち、あるひは盟友ディオーンが返却したその身代金を受け取らず、プラトーンにその金で小庭園（アカデーメシアに?）を買ひ與へたといふ。（D.L.iii.19-20）エピクロスは私費で「庭園」（愚者の樂園?）を購入したが、恐らくそれ以前に初めて「庭園」（賢者の庭?）で哲學した人としてのデーモクリトス（「市郊外に〔購入した〕庭園を區切つて作つた小部屋に立て籠もるほど、勤勉に思索したといふ。」[D.L.ix.36] 第三子として父親の遺産を100タラント=6000ムナを相續し使ひ果たしたといふ。「庭園」は私費で購入したのではないか。）ほぼ同時期に、デーモクリトスに一切言及しないと非難される（D.L.iii.25）プラトーンには、パトロンのがゐたのである。註4(8)、参照。テオフラストスまた然りである。（D.L.v.39,52）古代では哲學と「その思索や談義、修養に最適の場」たる庭園に密接な関係が認められるのに、なぜか「近代哲學は『庭園』を大抵切り捨てて顧みなかつた。」（D.E.Cooper, *A Philosophy of Gardens*, Oxford U.P., 2006, pp.1,6）ジュネーヴ近郊の「快適莊（Les Délices）」と命名された地所附きの邸、つまり「エピクロスの庭園をもつ哲學者の宮殿」を根城にしたヴォルテールは例外の一

人であらう。

なほ、この「太鼓持ち（幫間）」をディオニュソス神への「迎合」と読むのは文脈上、無理があらう。

- (3)前註8(1)の「水母」( $\pi\lambda\epsilon\acute{\upsilon}\mu\omega\nu$ )と同様に、この“ $\chi\rho\nu\sigma\sigma\acute{\upsilon}\nu$  (黄金の)”も意味の不明な語である。毆米語譯を反映する邦譯語には「金満家」(曉烏武雄)、「黄金哲人」(出隆・岩崎允胤)、「黄金の人」(加来彰俊)がある。B.Farrington (*Science and Politics in the Ancient World*, London, 1939, pp.98, 130) や DeWitt (*Epicurus*, p.97) は、ヘーシオドス五族神話 (Hesiod. *Erg.* 109-201) 由來と思はれる Plat. *Rep.* 415A (また 546E-547A) を念頭に置いて、優れた守護者 (哲人) を金の種族、その補助者を銀の種族、農夫や職人を青銅あるひは鐵の種族とした規定を根據としてゐる。Bailey [the golden man (philosopher of the highest class)], Hicks [the golden Plato], Parente [uomo d'oro], Sammartano, Arrighetti [l'aureo], Bignone [ingenuo, bamboccione] (*Epicuro*, p.199, n.3.金好きの神話上の愚かな人物、罰として驢馬の耳に變へられたあのミダス王に比する), Hübner [la richesse] 等はこの系列に屬する。獨特の解釋は、Apelt [eine Goldjungen (男色を當てつける) お稚兒], Kochalsky [unbezahlbar 高くて手が出ない、値がつけられないもの], Lask [le doré 金鍍金されたもの。聊かずれるが、Farrington や DeWitt の系譜] などである。最も説得的なのは、当時のアテナイの教育・教養の中心にあつたプラトーン哲學を強く意識した、プラトーンの“ $\chi\rho\nu\sigma\sigma\acute{\upsilon}\nu$  (黄金の=英譯語 fine 「華美華麗で、凝りすぎた」)”なる文體に對する皮肉と當てこすりと解する Hicks [the golden Plato] の説明であらう。(Diogenes Laertius, vol.2, pp.536-37) 註2(2)、参照。Hicks が Bignone に據つて示すルキアーノスの用例は、希英語字引 L.&S. (p.2009) “ $\chi\rho\acute{\upsilon}\sigma\epsilon\omicron\varsigma$ ” : III, b Luc, *Laps.* I にも擧げられてゐる。他に、 $\chi\rho\nu\sigma\acute{o}\sigma\tau\omicron\mu\omicron\varsigma$  (口をついて出る黄金の滴のやうな言の葉) の用例もある。一方、「誑し込む手練れの娼婦の名」で



當て擦られたものといふ見方もある。(Usener, *Epicurea*, Π λ á τ ω ν (Bonnetus ad Galeni) S.415.

實際、プラトーンの比類ない流麗な「手練れの」文體は古代世界では折り紙付きで、その筆名の由來の一つともなつた語を用ひて δ ι á τ - η ν π λ α τ ú τ η τ α τ η s ε ρ μ η ν ε ί α s (D.L.iii.4)「彫琢された豊かな文章は非の打ち所がなく」と評された。のみならず、 á ι Π λ α τ ω ν ι κ á ι ε ρ μ η ν ε ί α (Diony.Haricar.Pomp.1.2)「プラトーン操觚の天賦の才」が指摘されてゐる。

それに對してエピクロス自身の文體は、修辭的技巧に走らず常に的確で曖昧のなさ、明晰な單刀直入を身上としたといふ。(D.L.x.13-14) 註12(8)、參照。

- (4)底本の σ τ ρ α τ ε ú ε σ θ α ι (軍務に服す、遠征する)でなく、Usenerの補訂 τ ε ρ α τ ε ú ε σ θ α ι (騙す)を読む。なほ、D.L.x.1 にエピクロスの經歷に關聯し、瀆神罪の汚名を着せられてアテーナイからカルキスへ逃亡した最晩年のアリストテレースへの言及が一度だけあるが、その詳細については D.L.v.5-9、及び Aelian, *Var.Hist.*3.36を參照。

- (5)プロータゴラスについては次の記事がある。Athena.354C. (Usener172)「同じ手翰の中でエピクロスは、プロータゴラスはソフィストで、もとは運び屋、薪の運搬人だつたが、デーモクリトスの『筆耕』をするやうになつた。といふのも、デーモクリトスが相當な數の薪を束ねて纏めるその能力の高さに感心し、それを機にプロータゴラスを(使用人として)引き取つたからである。それで、プロータゴラスはある村で人々に(自分で筆耕したデーモクリトスの)數々の言葉を(ネタに)講釋した。この筆耕の仕事がきっかけでプロータゴラスはソフィストとして講釋をおつ始めるやうになつたのだ。」あるひは、D.L.ix.53.「人々が荷をその上に載せて運ぶ、所謂『肩當て(τ η ν κ α λ ο υ μ é ν η ν τ ú λ η ν)』を最初に考案したのが、アリストテレースが『教育について』

([Arist.*Frag.Selec.*63.ed.V.Rose,1886、岩波版『アリストテレス全集』第17巻「断片集」、605頁)で述べてゐるやうに、プロータゴラスだつた。といふのも、エピクロスも何かで言つてゐるやうに、プロータゴラスは(薪の)運び屋を生業としてゐたからだ。そして、その仕事の仕方をデーモクリトスに褒めそやされたのだが、きつかけはプロータゴラスが薪を束ねたところをデーモクリトスに見られたことにあつた。] Rhetor Incertvs in Crameri anecdot.Paris. t.I.171 [Usener172] には、プロータゴラスは早熟の才人で、晩學の人であるはずがないと、エピクロスが斷言したとある。

- (6)Kochalskyはこのヘーラクレイトスに對する惡口を、ニーチェを彷彿させる“Umwerter alle Werte (全價値の轉倒)”(*Das Leben und die Lehre Epikurs*,S.3)と獨譯してゐる。しかし、古代では萬物流轉説のヘーラクレイトスにはむしろ「ὁ σκοτεινός (摺み所のない晦澁家)」(cf. Arist.*de Mundo*.396B20, Cic.*de Fin.*2.5.15,Luc.i.639 “ob obscuram linguam”)といふ評價が流布し定着してゐた。また、エピクロスのエウリュロコス宛手翰の一節にある言葉、「(心術は己を忠實に掘り下げて、)自分(の立てた問ひと格闘し己の内に目を凝らしその答へ)に耳を澄ました([ἀκοῦσαί] ἀλλ’ εὐτοῦ) 創案」(D.L.x.13)をまさに彷彿させるやうな、ヘーラクレイトスの矜持に満ちた言葉が知られてゐる。「ヘーラクレイトスは誰の教へも受けなかつたが、それどころか『自分自身を掘り下げ、どんなことも自分自身に尋ね、その答への聲に耳を傾けることで悟つた』と言ふのが口癖だつた。(ἡκουσέτ’ οὐδενός, ἀλλ’ αὐτὸν ἐφηδίζῃσασται καὶ μαθεῖν πάντα παρ’ εὐτοῦ)」(D.L.ix.5,cf.D.-K. “Herakleitos” Fr.101,Plut.*adv.Colot.*1118C) プラトーン主義者プルートルコスの念頭には、Plat.*Phaidr.*229E-230Aの數節があつたかも知れない。デルフォイの金言どほりに、「汝自身を知れ(γνῶθι σαυτόν, Nosce te ipsum)」といふ肝心要の事項に無知な

「わたし（ソクラテース）」は、「さうした（自分に無関係な）事項ではなく、私自身を吟味するとしやう（230A.σ κ ο π ῶ ο ὕ τ α ὕ τ α ἄ λ λ' ἐ μ α υ τ ο ν）」とある。

- (7)「庭園」(賢者の庭?)で哲學した人としてのデモクリトスについては、「市郊外に〔購入した〕庭園を區切つて作つた小部屋に立て籠もるほど、勤勉に思索したと」(D.L.ix.36)と言はれる。第三子として父親の遺産を100タラント=600ムナを相續しすべて蕩盡したといふ。アカデメイア學園は寄附で、コロノスの丘附近の私邸「小園」は恐らく私費で購つたプラトーン以前に、デモクリトスは「庭園」を思索の場所として私費で購入した嚆矢のやうに思はれる。確かにロゴスによる想起の営みである「哲學の轉回」に集中したプラトーンの描くソクラテースは、イリソス川の辺りで對話と思索を繰り返しても、「哲學する場所としての庭」の環境にも土壤にも泉にも關心を拂はなかつた。しかし、デモクリトス以降は事情が異なる。

「プラトンが紀元三九〇年に購入したアカデモスの森は八百年以上も存続し、ギリシャ人たちに彼らの哲学の場所として役立ってきたのである。ギリシャ哲学は、庭そのものにはほとんど關心を有してこなかったけれども、庭ときわめて密接に結びついている。」(ヴォルフガング・タイヒェルト/岩田行一訳『象徴としての庭園』、青土社、1996年、204頁。)テオフラストスまた然り。(D.L.v.39,52) 14人の棟梁を輩出したといふエピクロスの「庭園」もまた例外ではない。註9(5)、參照。

- (8)アンティドロースのテキスト上の出典は、4.Frag.Pap.418 (VIII 77) [W.Crönert, *Kolotes u. Menedemos*, S.19]、Plut.*adv.Col.*1126A [コーローテースの論敵としてのアンティドロース]、D.L.v.92 [ΑὐτοδωροςをἈντιδωροςに読み替へる。Crönert, *ibid.* S.24-25]、本D.L.x.8の4箇所あり、R.Philippson (R.E. *Timokrates*), S.1269) は、アンティドロースがもともとデモクリトス流原子論者ナウシファネスの弟子と見てゐる。メートロドロスの兄ティモクラテースと同様に、

エピクロスに造反しながら、アカデーメイア派、ペリパトス派、ストア派の諸派を遍歴した不見轉の形跡はないらしい。註4(9)、参照。むしろ、造反前にはエピクロス一統の一人としての立場から、アカデーメイア派、ピュータゴラス派、ペリパトス派を遍歴したやうに思はれるヘラクレイデース〔・ポンティクス,D.L.v.86-94〕の著書『正義について』を批判したといふ。(D.L.v.92)

- (9)テキストに異同があるが、諸寫本上の  $\tau\omicron\upsilon\varsigma\ \kappa\rho\zeta\iota\kappa\eta\nu\omicron\upsilon\varsigma$  (キュジコス派) を採つた底本を読む。C.Baillyの本文はReinesiusの  $\kappa\rho\nu\iota\kappa\omicron\upsilon\varsigma$  (キュニコス派) を採る一方、Gassendiは  $\kappa\rho\eta\nu\alpha\iota\kappa\omicron\upsilon\varsigma$  (キュレーナイ派) と読んでゐる。かうした底本の讀みの背景には、既にPlat.Leg.821A-822Cで「太陽や月を神々として探求する天文学」が予表されたやうに、ピュトクレース(註5(3)、参照)に宛てられたエピクロスの「第二の手翰」(天象論)との關はりがある。「太陽や月を神々としなす」エピクロス一統と、異神の導入を圖る、天文・幾何學者エウドクソスの後裔キュジコス派(天文・自然占星術)との間の激しい對立と論争があつた。(Arrighetti [97], n. [69], p.674, n. [79], pp.522-523, Appendice I, Usener 109) エピクロス一統とキュレーナイ派には「快樂説」(D.L.x.128-132, 136-137)に懸隔があり、エピクロス派の達人はキュニコス派のやうな生き方はしない(D.L.x.119)とされるが、この三派の間には、相對的な差異はあつても、キュジコス派に對するやうな非妥協的な激しい睨み合ひや反目はないだらう。「天変占星術」、「宿命占星術」、天文学でも否定できない「自然占星術(占星氣象術)」の區分については、中山茂『占星術』、朝日文庫、1993年、168-178頁、参照。また荒木俊馬『西洋占星術』、恒星社厚生閣、昭和38年、88-89頁。

- (10)「問答法」の詳細については、註31(1)、参照。D.L.x.31「(通念に基づく、肯定・否定なんでもありの蓋然的で、欺瞞的な)問答法は人を口車に乗せて欺く討究の外道だとして、(エピクロス)社中はこの考法を

斥けてゐる。」(cf.Arist.Rh.1354a) このエピクロスの否定したとされる「問答法」は、後にストア派に繼承されるといふメガラ派の、パルメニデース及びエレア派（ゼーノーン）譲りの一元論的な「逆説」を多用する「詭辯、屁理屈（sophism）」、「論争のための論争」の論法をいふのであらう。パルメニデースやソークラテースの問答法そのものは「詭辯」ではなかつたかも知れないが。D.L.vii.180には、猥談狂（D.L.vii.187,188,x.3）で知られた古ストア派のクリュシッポスが、「問答法の巧者たちの間で名声を博してゐた」と記されてゐる。ところで、メガラ派には哲學史への功績、貢獻が殆どなかつたと言はれる。メガラ派は公然たる一統の組織的な纏まりをもたない論理辯證の學派で、ソークラテースの同輩の取り巻きの一人で、プラトーンの兄弟子筋に當たる（ソークラテース刑死後は弟弟子プラトーン等を庇護したといふ）、メガラのエウクレイデース（前390年頃在世）を始祖とする一派。始祖歿後には、未組織の同派は存続の危機に直面したらしい。弟子の中では、エウブリデース、その弟子スティルポーンが著名。スティルポーンの逸話については、D.L.i.16,ii.100,105,111,112 [名高い],113-117 [忌憚のない直截な物の言ひをし、心得のない者に對しては然るべき口をきく] - 120,126, 134,vi.76,vii.2,4,ix.61,109で扱はれてゐる。

確かにエピクロスのメガラ派に對する批判、反論、揶揄はあつたらしい。セネカがエピクロスのスティルポーンに對するそれを（ディオゲネス・ラエルティオスを参照した上で？、あるいは傳存してゐないEpicuri epistula [手翰、文書]を讀んで？）記録してゐる。Senec.Ep.9.1,8,18 ([Usener173,174,175. Arrighetti [132]]).

- (11)ピュローンは、デーモクリトスと出會ふ前の、若きナウシファネスが懷疑論を學んだ師とされる人。ナウシファネスに懷疑論の影響は殆どないとされる。註7(5)、参照。しかし、D.L.ix.64には次の一節がある。「ナウシファネスもまた既に若かつた頃に（ピュローンに）虜にされて心酔してゐたのである。それで、ナウシファネスは、論法はピュローンの伎

倆に倣ひ、講釋の中身の方は自説をよしとすべきだと垂れるのを、決まり文句にしてゐた。そして（なぜか）かう言ひ添へることも多かつた。すなはち、（わが門人の）エピクロスもピュローンの、議論を覆して元の木阿彌にする論法に脱帽し、自分にしつこく食ひ下がつてピュローンのことをあれこれ尋ねて聞き出さうとしたのだと。」

- 9(1) Cf. *Plut. adv. Ep. Beat.* 1086E. アカデーメイア派、ピュータゴラス派、ペリパトス派を遍歴したやうに思はれるヘラクレイデース〔・ポンティクス?〕(D.L.v.86-94) が、何の罪もないエピクロスとメートロドロースに、「われわれ」はいかに理不盡な因縁をつけて槍玉に擧げてゐることかと、仲間内で反省の辯を述べてゐるが、一笑に附される一幕がある。造反したティモクラテースを主要情報源とし、神の世界支配の「攝理」を否定する徹底的な利己主義者と極めつけられた、ストア派等による手練手管のエピクロス憎悪は止め處ないが、ディオゲネス・ラエルティオスだけが例外的にエピクロスを擁護してゐるわけではないやうである。

セイレーンの「蜜の如く甘い(魅惑の)聲」で心術を唱道したエピクロスの静塾園は、僅かな造反者を出しながらも、心酔し歸依する者で「門前市をなす賑ひで・・・エピクロスの衣鉢は他の學統がほぼすべて途絶へた後も聯綿と相承され、數知れぬ棟梁が引きも切らず社中から輩出した」[D.L.x.9、註9(5)、參照。]といふ。かうしたエピクロスとその一統に對する、古代世界を引きずりながら數多に類型化された激しい毀譽褒貶は再び近代世界にも持ち込まれ、「哲學的寄生虫の懦夫ども、アンチ・キリスト聯、近代科學の地固めをした聯中、半可通の好色家ども・・・」(J.Gaskin (ed.), *The Epicurean Philosophers*, The Everyman Library, 1995, p.310) などと、思想史上の影響と跡付けは魅惑的だが、どちらかと言へば、時代狀況に合はせ惡罵に傾く色付けが施された。(cf. H.Jones, *The Epicurean Tradition*, London & New York, 1989) なほ、近代世界ではニーチェのエピクロス心酔は知らぬ人がないし、ブルクハルトはエピクロスが「真に自由な人間に向かつて極端な努力をした」、

「世界史のうえで重要な最後のアテナイ人」(『ギリシア文化史』新井靖一訳、筑摩書房、1992年、第三巻[540頁]、1993年、第五巻[252頁])だと語り、ヘーゲルは「その哲学は自己の内部にひきこもり、国家生活のうちにはもはや存在しない法や道徳を、内面にさがしもとめようとした」(『哲学史講義(中)』長谷川宏訳、河出書房新社、1994年、249頁)と規定し、Usenerは「エピクロスの哲学ではなく、エピクロスという人間(生のままの心に觸れること)に大きく心動かされた」(Epicurea,S.v)といふ。

- (2)エピクロスといふ個人を顕彰する青銅胸像とは、不思議な感じがするが、古代ギリシアでは大理石像以上に青銅像が多く制作され、幾何學模様時代には既に青銅小像が作られてゐる。「前七世紀以降には大理石像と同じく等身、もしくはそれ以上の鑄銅像の盛んに行われ、古代の神域や公共の場を満たして居たことは当時の金石文や古代文献からも知られ、また多くの大理石模像はその原作の青銅であったことをはっきりと示してゐる。しかしつぶしのきく青銅作品は古代末期の金属缺乏や民族移動や中世の異教排撃によって悉く姿を消してしまった。」(澤柳大五郎『ギリシアの美術』、岩波新書、1964年、144頁。)ヘレニズム時代には親密なもの、身近なものの關心を寄せる個人的嗜好の風靡を背景として、公共的性格を帯びた静謐な古典的理想化よりも、個人の動感豊かな徹底した個性リアリズムが寫實的肖像(大理石像、青銅像)制作の主流となつた。肖像藝術自身が前五世紀後半の古典期盛期以降、前四世紀全期を通してヘレニズム時代に急速に重要性を増し、多様に發達する。ヘレニズム時代には、原作が失はれ、ローマ時代の模像作品で知られるプラトーン、アリストテレースといった哲學者、ソフォクレース、エウリピデースといった文學者等の肖像作品を超へて、個人モデルの底辺が擴大するに伴ひ、「本物そつくり」を演出する力動的なりアリズムの技法は繊細な差異を深化させ、感受性豊かに細分化した。「アレクサンドロス大王の肖像」(大理石像、宮廷彫刻家リュシッポス作、前2世紀)、「政治家デー

モステネースの肖像」(前3世紀前半、前280/79年、自裁した故人デーモステネースの名譽回復顯彰を目的とする、彫刻家ポリュエウクトス原作の青銅立像。ローマ時代以降の大理石模像が50體ほど現存。後2世紀、旅行家パウサーニ阿斯は、アゴラのアレース青殿の傍らにこの青銅立像を見てゐる。cf.Paus.1.8.2-4, Plut. Demoth.30.5)、「哲學者像頭部」(沈没船から回収された古代青銅像原作。前3世紀後半-前2世紀)等が現存する。なほ、ディオゲネス・ラエルティオスはエピクロスの本青銅胸像の他に、D.L.ii.43 [ソクラテースの青銅像、悲劇作家アステュダマスの青銅像]、D.L.vi.78 [シノベのディオゲネス(キュニコス派)の青銅像]、D.L.vii.6 [ストーア派のゼーノーンの青銅像]、D.L.vii.182 [古ストーア派のクリュシッポスの彫(塑)像。ケラメイコス區にあり、傍らの騎馬像に隠れてゐた]、D.L.ix.39 [デモクリトスの青銅像]の例も擧げてゐる。一方、アテーナイの僧主ヒッパルコス殺害の功績者たちは尊崇を集めて、ケラメイコス(陶師區)に青銅の群像が建てられたことが知られる。(Xenoph. Hier.4.5) ポリスは僧主の殺害が好きだつたらしい。

Sent. Vat.36「エピクロスは人柄そのものが水際立つてゐて、心がやはらかに耕され、豊かに満されてゐたといふ點で、他の何人のそれ及び難く、神話、傳説さながらの語り草になると考へられやう。」(『ヴァチカン箴言集』収載の斷片でありながら、エピクロス後繼のヘルマルコスの言葉と推測されるてゐる。)エピクロスといふ個人を顯彰する青銅胸像はその場合に大きな力を發揮しただらう。實際、後世にキケロの友人でエピクロスに心酔したアッティクスは次のやうに「肖像の福音」を證言してゐる。「私は忘れやうとしても、エピクロスのことを忘れることができません。僚友たちはエピクロスの肖像を額繪にしてゐるだけでなく、(それを片時も離さないやうに)酒杯や指輪にも刻みつけてゐるのです。」(Cic. de Fin.v.3)

ところで、アテーナイでは、殊に著しく刈り込んだ短髪は自由市民よ



り奴隷に相應しい髪形とされ、髪と鬚を適度に蓄へる（鬚剃りは自由、口鬚だけを残すのは野蠻とされた）のが普通のおしゃれで、むしろ刈り込まない長髪と鬚は哲學者たちの別の徴だつた。傳存するエピクロスの胸像（大理石像）もかうした特徴を備へてゐる。しかし、ストア派やキュコス（犬儒）派は敢へて流行輕侮の意圖から、短髪にしてゐたといふ。（cf.D.L.vi.31）

B.Frischerは、エピクロスを初めとする、「四天王」の立像、坐像、胸像の寫實的肖像（青銅像、大理石像）の制作が、エピクロス一統には「心術」の普及や浸透に他派に見られない特別な意義、つまり儀禮を本質とするギリシア宗教における神像といふ「物神化（fetishism）」の系譜を引いてゐたとする。（*The Sculpted Word*, University of California Press, 1982）エピクロスの寫實的坐像そのものが「像に刻まれた福音（心術）」（p.xvi）と、セイレーンの「蜜の如く甘い（魅惑の）聲」とを可視モデル化した「神像」、「神さながらの癒し手」、「心を耕す啓蒙、再生」の徴、完全な「自己實現」の目標の具現化として讃仰的とされたといふのである。（p.282）ドイツ・ベルガモン博物館収蔵品のやうな、現在に傳はるいくつかのエピクロスのトルソには、蜜のやうな「柔和」といふよりむしろ「武骨」の印象を禁じ得ないが、それかあらぬかエピクロスの靜塾園は「門前市をなす賑はいで・・・それで」ディオゲネス・ラエルティオスは、「エピクロスの衣鉢は他の學統がほぼすべて途絶へた後も聯綿と相承され、數知れぬ棟梁が引きも切らず社中から輩出した」（D.L.x.9、註9(5)、參照）と傳へてゐる。

- (3)  $\tau\alpha\iota\varsigma\delta\omicron\gamma\mu\alpha\tau\iota\kappa\alpha\iota\varsigma\alpha\upsilon\tau\omicron\upsilon\sigma\epsilon\iota\rho\eta\sigma\iota$  「(死の影の濃い) セイレーンの呼び聲のやうなその(魅惑の) 數々の術理に」。
- アリストテレース『對話篇（ネリントス）』（Fr.64, Ross<sup>3</sup>、『アリストテレース全集・17』、宮内璋、松本厚訳、岩波書店、1972年、535頁）には、プラトーンの『ゴルギアース』を一讀後、「直ちに彼の畑やぶどうの樹を棄て去つて、彼の靈魂をプラトンの指導に委ね、それをプラトンの哲

学が播かれ植えつけられる場たらしめた」コリントスの一農夫の逸話が語られてゐる。これはペルシアの呪術師・神官（マゴス）たちが遠路教へを求めてアカデーメシアに聯なつたり（Anonymi, *V. Plat.* 6.19-22）、あるカルダイア人（ペルシア神官階級の総稱）がプラトーンの客人として遇されたこと（*Acad. Index Herc. col. III. 40-41, p. 13*）とも相俟つて、アカデーメシア學園の開放的性格（婦女の入門も例外的に認められた。註4(6)、参照）を示すであらうが、その後、タキトス（55年頃-115年以後。Tacitus, *Dialog.*）にもプラトーンの『ゴルギアース』の影響が認められるほど、續々と現れる「哲學への回心者」（A. D. Nock）の初期の例とされる。（cf. E. R. Dodds, *Plato: Gorgias*, Oxford Clarendon Press, 1959, p. 30 n. 3）時代と學派は異なるが、エピクロスの許にもさうした「回心者」が蟄集したといふことである。中期アカデーメシア派の創始者アルケシラオスは、「その他の學派からはエピクロスの一統へと宗旨替へして轉向する者が相當ゐるのに、エピクロスの社中から他派に乗り換へる者が一人もゐないのはどうしたわけかと尋ねる人に、かう応へた・・・」（D. L. iv. 43）と、ディオゲネス・ラエルティオスは傳へてゐる。しかし、そのディオゲネス・ラエルティオスも例外を三人擧げてゐる。エピクロス腹心のメートロドーロスの兄ティモクラテース [D. L. x. 6. 註4(9)、参照。]、そして「根つからの口三味線」とエピクロスに罵られたといふアンティドーロス [D. L. x. 8. 註8(8)、参照。]、新アカデーメシア派の創始者キュレーネのカルネアデースの許に走つた、ストラトニケイア者のメートロドーロスである。このエピクロス腹心のメートロドーロスとは同名の異人同に關する記述は、時代錯誤的であるため、事實は判然としなない。次註9(4)、参照。

死の影を宿したセイレーンの「蜜の如く甘い（魅惑の）聲」（ $\phi\theta\omicron\gamma\gamma\eta$ 、 $\phi\theta\acute{o}\gamma\gamma\omicron\varsigma$ ）については、Hom. *Odyss.* 12.41, 159, 198、参照。「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り。萬の物これに由りて成り、成りたる物にして一つと

して之によらで成りたるはなし。之に生命あり、この生命は人の光なりき。』（『ヨハネ傳（1.1-4）』、日本聖書協会文語譯）、「神光あれと言たまひければ光ありき」（『創世記（1.3）』同上）、「怒りを歌へ、ムウサ（女神）よ、ペーレウスの子アキレウスの」（『イーリアス（1.1）』、呉茂一譯）が象徴するやうに、エジプト・オリエントの一種の「言葉・言靈」信仰の傳統が背景に生きてゐるかも知れない。肯定も否定もできないが、この一節に關してC.Baileyは「一統が（神のごとき）エピクロスの術理を（修正發展もさせずに）頑なに墨守し續けた悪習は（古代では）評判で、ルクレティウスにその絶頂を見る」（*Epicurus*, p.407cf.E.Bignone, *Epicuro*, p.200 n.2）と注釋してゐる。實際、「（エピクロスは）社中には専ら心に刻んで牢記する遣り方で、多彩な自分の著作を拳拳服膺させてゐた」（D.L.x.12）といふ。

しかし、セネカは別の證言を残してゐる。Senec.Ep.79.15 (Usener188, Arrighetti [128])「御承知のやうに、學識豊かな教養人のみならず、かかる蒙昧な愚民大衆もまたエピクロスをいかに尊んだかと言へば、一目置くことはまつたくありませんでした。エピクロスは地元のアテナイですら無名だつたのです。郊外に隠れ住んでゐたからです。・・・（腹心のメートロドーロスより長生きをしたエピクロスがある手紙でかう書いてゐる。）・・・自分とメートロドーロスには何の被害もなく、かくも目出度いことばかりだつた。といふのも、あのメートロドーロス自身が雷名を誦はれた希臘世界で無名だつたばかりか、殆ど世に出ることもなかつたからです。」註9(5)、參照。

なほ、D.L.x.31にはこの本D.L.x.9の一節には見られない  $\phi\theta\acute{o}\gamma\gamma\omicron\varsigma$  の複數對格形を含む “ $\kappa\alpha\tau\grave{\alpha}\tau\omicron\upsilon\varsigma\tau\acute{\omega}\nu\pi\rho\alpha\gamma\mu\acute{\alpha}\tau\omega\nu\phi\theta\acute{o}\gamma\gamma\omicron\upsilon\varsigma$ ” の句が現れる。この  $\phi\theta\acute{o}\gamma\gamma\omicron\varsigma$  は様々に譯されてゐるが、ほぼ「事物の聲（語るところ）」が定譯である。“to employ the ordinary terms for things” (R.D.Hicks)、“to be guided by what things say of themselves” (C.Bailey)、“segundo il nome naturale delle

cosa” (G.Arrighetti)、“was die Dinge selbst von sich aussagen” (A.Kochalsky)、“nach der natürlichen Sprache der Dinge” (O.Apelt)、“ascoltare i suoni delle cose” (C.Sammartano)、“tener dietro alla voce del cose” (E.Bignone)、“de procéder en se rapportant aux sons qui appartiennent aux choses” (A.Laks)、「事物それ自身の語るところに依つて」(曉烏譯)、「事物がそれみずからを語るところに従つて」(出・岩崎譯)、「事物そのものが語るところに従つて」(加来譯)。多義的な「事物 (τὰ πράγματα)」とは「自然學者」(エピクロスは自然學者の末流とされてゐる。[D.L.x.3]) にとつての「事物」であるから、勿論人間の主観から獨立した「(客觀的世界に存在する) 外的事物」であり、「眞理」はこの「客觀的世界」に存在すると解されてゐるのであらう。主観はこの客觀的世界の「眞理」と一致しなければならないといふ前提がある。しかし、果たしてさうなのだらうか。

ディオゲネス・ラエルティオスに Hom. Odyss. 12.41, 159, 198 への聯想が働いたか否かは分からないが、この “χωρεῖν κατὰ τοῦ στήν πρᾶγματων φθόγγους” は「言葉の『仕事 (實相、本分)』を見据えることに置く」といふほどの意味ではないか。ところで、エピクロス (K. Δ. 37, Sent. Vat. 33, Ep. adv. Hrod. [D.L.x.37]) とルクレティウス (Luc. 3.931) 自身のテキストには類似の表現が散見される。K. Δ. 37 “τοῖς μὲν φωναῖς κεν αἰς ἑαυτοῦ σσυνταράττουσιν, ἀλλ’ ἀπλῶς εἰς τὰ πράγματα βλέπουσιν

([問答法などによる] 無意味で不毛な言葉の遣り取りで自分を煩はさず、只管言葉の仕事 (働き、實相) を凝視する人々にとつて・・・)”、Sent. Vat. 33 “Σαρκοῦς φωνῇ τὸ μὲν πεινῆν・・・ (飢へないことが・・・肉體の肝心要 [叫び] である)”、Ep. adv. Hrod. [D.L.x.37] “μὲν・・・κενοῦς φθόγγους ἔχωμεν (自分の内側で要領を得ない内言語が現はれないやうに・・・)”、Luc. 3.931 “Denique si vocem rerum natura

repente mittat・・・(なほまた、[自分の]「自然(ミクロコスモス?)」  
が突然聲を發して・・・)”。ディオゲネス・ラエルティオスは當然ルク  
レティウス以外の、かうした用例を知つてゐたはずだから、 $\phi\theta\acute{o}\gamma\gamma-$   
 $os$ は「内言語」と解してよいのではないか。

- (4)新アカデーメイア(プラトーン)派を創始したキュレーネのカルネアデ  
ース(前214/3年-前129年)は、ストア派やエピクロス派の獨斷論、  
信條主義を排して、アルケシラーオス(前3世紀。詳細はD.L.vi.28-45)  
譲りの、確實な知識には到達できないとする懷疑主義に磨きをかけ、眞  
理規準といふより行動の指針を、蓋然的ではあつても散文的な三段論法  
に求めた。キケロはカルネアデース流懷疑主義を信奉した。エピクロス  
からカルネアデースに鞍替へしたと、ディオゲネス・ラエルティオスの  
言ふ(イオーニア地方は)ストラトニケイア者のメートロドーロスは、  
無論エピクロスの腹心で「四天王」の一人のメートロドーロスとは同名  
異人だが、キケロは『辯論家について』(Cic.de Or.1.45,cf.Idem.Luc16)  
で、同人がカルネアデースに歸依した舌鋒の鋭さでは隨一の弟子だと證  
言してゐる。前270年に歿したエピクロスは當然カルネアデースの同時  
代人ではありえないので、ディオゲネス・ラエルティオスに何かの誤解  
があつたのかどうか。なほ、C.Baileyはフィロデーモスの記事を根據と  
するUsener(*Epicurea*,S.413,Philod.*Ind.Ac.col.xxiv,xxvi*)説を受けて、  
ストラトニケイア者のメートロドーロスは、エピクロスのではなく、間  
違ひなく“第一人者(庭園の獨裁者?)”アポッロドーロス(D.L.x.25)  
の弟子だつたと斷定してゐる。(*Epicurus*,p.407,cf.I.Parente,*Epicuro*,  
p.101,n.5, E.Bignone,*Epicuro*,p.22 n.2) 時代的整合性から、このメート  
ロドーロスがカルネアデースの許に走つた斷定されたいふことか。

なほ、カルネアデース自身についてはD.Liv.62-66に詳しい解説があ  
るが、エピクロスとカルネアデースとの關はりとはD.L.x.26-27で次のやう  
に語られてゐる。「(新アカデーメイア派の)カルネアデースは『寄生虫  
だ、彼奴(ストア派のクリュシッポス)は、(他人の)本喰いの』と

囃し立て、かう毒づいたほどである。『といふのも、エピクロスが結構な書き物をしやうものなら、功名心に驅られてきまつてそれを凌ごうと亂作するのがクリュシッポスだつたからだ。そしてそのためクリュシッポスは性懲りもなく同じネタや氣紛れな思ひつきを書き散らすだけでなく、急ぐあまり書き殴つた駄法螺を改めやうともしなかつた。しかもおんぶにだつこの博引旁證で、述作はどれも（誰の本かわからないほど）他人の所説で滿杯といふ爲體だつた。』（D.L.vii.181では、エピクロス社中のアポッロドーロスの言葉となつてゐる。）前270年に歿したエピクロスは、何かの資料や傳聞に基づいてこのやうにカルネアデースが好意的に言及した時、無論既に故人であつた。

- (5)ディオゲネス・ラエルティオスの言ふ「數知れぬ棟梁」とは、Suid.《Ἐπικύριος》によると、エピクロス歿後（前270年）から“ἔως Καίσαρος”（前44年、Julius Caesar暗殺。アウグストス帝時代の開始。前40年頃-後60年頃、ローマの哲學がエピクロス派の凋落に伴ひ、ストア派主流となる。）の間、227年（σκη）にわたり「14人（ιδ）」である。就中、この靜塾園の社中を束ねる棟梁中の“第一人者（庭園の獨裁者？）”となつたアポッロドーロスは、實に四〇〇巻を超える多作の傑物だつたといふ。（D.L.x.25）それにもかかはらず、「エピクロス学派は分裂することなく、彼の教説を厳しく堅持したのであり、また彼の教説を持続させることで満足したのである。そのため、（ルクレティウスを除いては）有名なエピクロス学派の哲学者は一人もいない。」（ブルクハルト『ギリシア文化史・第五卷』新井靖一訳、415頁。）神さながらの師エピクロスの一統では、師説のみならず師の生き方にも忠實に従ふことが求められた—Senec.*Ep.*xxv.5「あたかもエピクロスが注視してゐるかのやうに、すべてを爲せ」、Cic.*de Fin.*v.3「エピクロスの肖像を額繪にしてゐるだけでなく、（それを片時も離さないやうに）酒杯や指輪にも刻みつけてゐる」らしいが、そのためにエピクロス自身が工夫した第一の手法は著作の「暗誦」だつた。（D.L.x.12）エ

ピクロスは社中には専ら心に刻んで牢記させる遣り方で、恐らくアフォーリズム形式で綴られた多彩な自分の著作を拳拳服膺させてゐた。アフォーリズムは暗誦に耐へるのである。キケロは、「(懷疑主義の) わが師ピュローンは・・・卓越した記憶力のおかげで、エピクロスの箴言の大半をそれが書かれたそのままの言葉で朗誦することができた・・・」(Cic., *de nat. deor.* I.40.113 [Usener440]) とか、「エピクロスの『鑰となる箴言集』は幸せに生きるために簡潔に明言された、最も重要な箴言集だから・・・君たちはみな暗誦したはずです」(Idem, *de Fin.* II.7.20 [Usener, *Epicurea*, S.69]) と書いてゐる。

- 10(1)父と同名のエピクロスの兄弟ネオクレースについては、Plut. *adv. Ep. Beat.* 1100A (cf. Usener141) で、ブルータルコスは、エピクロスの名聲狂ひと自畫自賛を糾弾する文脈で、眞偽不明の次のエピクロスの一筆を擧げてゐる。「(わが) 兄弟ネオクレースはあからさまに、(四) 兄弟の中でエピクロスより賢い者はゐなかつたし、今もゐないと、言つてゐた。」同様に、Idem, *de frat. am.* 487D [Usener178] 「エピクロスに兄弟たちが大仰な敬愛を寄せるに至つたのは、その『哲學』以外でも萬事につけてもエピクロスの好意や心遣ひが露はで、何より『哲學』そのものに一同が感歎したからだ。・・・子供のときから、(兄弟の中で?) エピクロスより賢い者はゐないと、兄弟たちは仕込まれ、しかもさう明言してゐる以上・・・」。註3(3)、7(1)、参照。周知のやうに、二親への感恩の念に厚かつたエピクロスは「母親に宛てた手翰」(Fr.52-53, C.W.Chilton, *Diogenes of Oenoanda*, Oxford U.P., 1971, pp.19-20. Arrighetti [72, ad Matrem]) を残してゐる。Bailey は、父親以上に母思ひだつたと思はれるそのエピクロスの手翰を、それ記録したオイナンドのディオゲネス自身が書いたものではないかと疑ふ旨、註釋してゐるが。(Epicurus, p.407cf. E. Bignone, *Epicuro*, p.200 n.4))

- (2) ミュスはエピクロスの忠實な家僕(男奴隸)にして「一頭地を抜くと一目置かれた」優れた弟子とされる人。D.L.x.3,21にもう二回言及がある。

エピクロスの歿後、その遺言によつて解放される。Usenerはフィロデーモスの斷片（Usener152,153,154,155,Arrighetti[69], [79], [117]）の復原から、イオーニア地方を巡歴中のエピクロスがアテーナイからミュスと呼び寄せて留守中の社中の諸事情を報告させた事実があつたと推測した。（Usener,*Epicurea*,S.413）しかし、Arrighettiはそのテキストの復元と推測には無理があるとして、復元されたテキスト自体に訂正を加へた。そして、そこに美青年ピュトクレースへの言及があることから、フィロデーモスのいづれの斷片もが、神觀念をめぐるエピクロス一統とキュジコス派（天文・自然占星術）との激しい論争に關して記述したものと判斷してゐる。（Arrighetti,p.682,n. [117]）

なほ、Plut.*adv.Col.*1117D-E（Usener130,Arrighetti[54],Bailey.Fr.B 26）、參照。「（在ラムプサコスのイドメネウス宛とされるエピクロス手翰中の一節）わたしのもつ最上等〔術理の數々〕のものを、貴兄と（妻バティストの間の）子たちの内だけに限らず、それを廣げて獻身的な奴隷（家僕）の從者にも傳へなさい。わたしは敢へてそんなことを（貴兄に）指圖したい氣持ちになつたのです。」（一般には次のBaileyの英譯が流布。“Send us therefore offerings for the sustenance of our holy body on behalf of yourself and your children: this is how it occurs to me to put it”〔曉烏重譯『だから君及び君の子供達の爲めに此の我々の清淨な身體をささへてゆくに必要な食物をどうか送つてくれたまへ、ちよつと思ひついたままにこれだけ書いておく』〕

- (3)拙譯「その（鎮護國家の）神々を畏れ敬ふ心映へや、父祖の社禩（アテーナイ）を思ふ愛國の至情が筆舌に盡し難いものだつたのも尤もなことだつた。さもなければ、エピクロスは（一自由市民としてアテーナイに）移り住んで身を立てやうとはしなかつただらうが、まつたく以て然も有りなんと思はれる。（ $\epsilon\pi\epsilon\rho\beta\omicron\lambda\eta\gamma\acute{\alpha}\rho\epsilon\pi\iota\epsilon\iota\kappa\epsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$   
 $\omicron\upsilon\delta\epsilon\pi\omicron\lambda\iota\tau\epsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma\psi\alpha\tau\omicron.$ ）」

Baileyはかう言つてゐる。「確かに完全に純粹な宗教心から、神々の



ἀταρᾶξιᾶがその献身者におのづから傳はると考へられた。」  
(Epicurus, p.408) 果たしてさうだらうか。根據がない。

“ὕπερβολῇ γὰρ ἐπιεικεῖας οὐδὲ πολι-  
τεῖας ἡψατο.” この一句の他の様々な既存譯は、“οὐδὲ  
πολιτεῖας ἡψατο” を一様に「國事、政治に關與しなかつ  
た」と解してゐる。例へば、「彼（エピクロス）は餘りに遠慮し過ぎた  
ために、政治のことに關しては全然關與しなかつたらしい。」（曉烏譯）、  
「かれはまた、人並はずれて謙讓であつたので、國事にかかわろうとは  
しなかつた。」（出・岩崎譯）、「彼はあまりにも公正さを重んじすぎたた  
めに、國事にかかわることさえもしなかつたからである。」（加來譯）、  
“Hecarried deference to others to such excess that he did not even enter  
public life” (R.D.Hicks)、 “But from excess of modesty he would not  
take any part in politics” (C.Bailey)、 “Per eccesso di modestia si tenne  
lontanodalla politico” (G.Arrighetti)、 “certo infatti per eccessiva  
modestia neppur volle accedere alla vita politica” (E.Bignone)、  
“certamente per un eccesso di modestia ei non volle mai entrare nella  
vita pubblica” (R.Sammartano)、 “se si astenne dalla vita politica,ciò fu  
per un eccesso di modestia” (I.Parente)、 “Gab er sich doch nur aus  
übergroßer Bescheidenheit nicht mit Staatgeschäften ab”  
(A.Kochalsky)、 “Es war nur übergroße Bescheidenheit und  
Anstandsgefühl, das ihn abhielt, sich mit Staatgeschäften zu befassen”  
(O.Apelt)、 “car c'est par excès d'honnêteté qu'il s'est même abstenu de  
se mêler de politique” (A.Laks) 等々。

C.Baileyの註釋にその典型が集約されるやうに、既存譯にはエピクロ  
ス心術の「非政治性」を強調する次の前提が共通にあるやうに思はれる。  
「エピクロスが國事に關與しない眞の理由は、(ディオゲネス・ラエルテ  
イオスの言葉を信じないやうだが、)やはり『極度の遠慮(謙讓、公正?)』  
にあるのではなく、それが『心の靜謐(ἀταρᾶξιᾶ)』に致命的

だといふ強い確信にあり、だからこそ、國事への不關與策が採られたわけである。」(Epicurus,p.408) 同時に、「神々の『心の靜謐 ( $\acute{\alpha}\tau\alpha\rho\alpha\xi\acute{\iota}\alpha$ )』が、献身的な儀禮を盡す者におのづから傳はるはずだ。」(Epicurus,p.408) 後世の内在的解釋はむしろエピクロスの、神さながらの「心の靜謐」を究極の目的、「非政治性 (國事への不關與)」をそれへの到達手段とする兩者の一體性を重視してゐる。それに對して、古代の論敵プルートアルコス [註 4 (10)、參照] はキケロの諸書に先驅けて、『エピクロスに従つては、快く生きることは不可能であること』(Plut.adv.Ep.Beet.)、『コロテス駁論』(Idem.adv.Col)、『「隠れて生きよ」について』(Idem.de occu.viv.) の隨所で、エピクロスとその一統の裏返しの名声慾と一體で偽装された「非政治性 (國事への不關與)」の惡徳や欺瞞性を執拗に論難し告發してゐた。なほ、「隠れて生きよ ( $\Lambda\acute{\alpha}\theta\epsilon\beta\acute{\iota}\omega\sigma\alpha\varsigma$ .Usener551,Bailey,Fr.B86)」といふ入口に膾炙した一句は傳存するエピクロスやその一統のテキスト中には見出せず、論敵プルートアルコスが『「隠れて生きよ」について』(Plut.de occu.viv.) でエピクロス派の人生觀の中心を論難すべく間接的かつ象徴的に集約した一斷片なので、その言葉の信憑性を疑ふArrighetti [144] (Epicuro,p.490) はUsener551 やBailey [Fr.B86] とは異なつて、エピクロス初め同派の「斷片集」中に分類も收録もしない處置を採つてゐる。「隠れて生きよ」は論敵プルートアルコスの言葉を濫觴として、その後Ivlianus imp.、Themistius orat.、Philostatus uit、Ovidivs trist. Seneca等の諸家が何を根據にしてか、元々エピクロスの兄弟 (か父親か?) ネオクレースの言葉として援用するやうになつて、現代に傳はる。Usener,Epicurea,S.326-327にその用例がある。しかし、そのネオクレース説も相當怪しいことについては、G.Roskam,Live Unnoticed:On the vicissitudes of an Epicurean Doctrine,Brill,Leiden,2007,pp.69ff.、參照。

さて、既存譯とは異なつて、拙譯では文脈上、「 $\gamma\acute{\alpha}\rho$ 」は「さもないければ」、 $\acute{\upsilon}\pi\epsilon\rho\beta\omicron\lambda\acute{\eta}\epsilon\pi\acute{\iota}\epsilon\iota\kappa\epsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$  は「まつたく以て

然も有りなん（當然すぎるほど當然なことだが、道理も道理）」、「οὐδὲ πολιτείας ἤψατο」は「（一自由市民としてアテナイに）移り住んで身を立てやうとはしなかつたらう」と読んでゐる。つまり、「ἐπιεικεῖα」は「遠慮、謙譲、公正」等ではなく、「尤もなこと、無理からぬこと、合點の行くこと、自然、當然（reasonableness）」の意に、一方「πολιτεία」は「國事、官職、政治（tenure of public office, administration）」でなく、單に「そこで生きて行くこと、それと運命をともにすること、そこに生死を託すこと（life, living）」と解してゐる。本文脈では、殊更「國事への不關與」を讀む必要がないやうに思はれる。

他の一例、Sent. Vat. 58「われわれは世の習ひ、俗世間の常道の（桎梏、羈絆といふしがらみの）獄屋から（ἐκ τοῦ περὶ τὰ ἐγκύκλια καὶ πολιτικὰ δεσμωτηρίου）自分自身を解き放たなければならない。」（人は世間師であつてはならないといふ主意であらう。エピクロス自身の言葉か、腹心のメートロドロス等の言葉か、判然としないが。）ここでもやはりエピクロスとその一統の、「國事への不關與」といふ「非政治性」を殊更強調する必要はないやうに思はれる。

一方、D.L.x.119には「(τὸν σοφόν) οὐδὲ πολιτείας ἐσθαι」 「(エピクロス派の達人は) 出しやばつて國事に關與などしない」といふ關聯句がある。既にプラトーンは、國法よりも、國政を掌握しみづからに従ふ「市民大衆（デーモス）」を「普通よりにぶいところのある大きな馬」（Plat. Apol. 30E）、あるいは氣紛れな激情に驅られる「巨大な生き物」（Idem. Rep. 493C. cf. Herdot. 5.97）に譬へて、處刑されるソークラテースに次のやうに辯明させてゐた。「正直一途の反対をして、多くの不正や違法が國家社会のうちに行為れるのを、どこまでも妨害しようとするならば、人間誰も身を全うする者はないだろう。むしろ本当に正義のために戦おうとする者は、それで少しの間でも、身を

全うしていようとするならば、私人としてあることが必要なのであって、公人として行動すべきではないのです。」(Idem.Apol.32A.田中美知太郎・池田美恵訳)確かに政治の世界は、人間の内面、「内心の秩序としての“自然”」とは無関係な、命の危険を伴ふ殺伐たる人の砂漠であり、醒めた呑み込みの早い人ならばそこから脱出したいと思ふ苦界だといふのであらう。万人の万人に對する不信と敵意が醸成されざるを得ない。そこで、諸家がその理由としてよく參照を指示するのが、「安全と安心」の關はりを説いたとされる K.Δ.7、K.Δ.14 のアフォリズムである。

K.Δ.7「(財産や權勢によつて)聲望を得て英名赫々たらんと目論んだ聯中がゐて、さうなれば世間での暮らしも大船に乗つた氣であられる(ἐξ ἀνθρώπων ἀσφάλεια)と考へたわけだが、結果はどうか。もしかした聯中の生き方が搖がなければ(ἀσφαλής)、聯中は(むしろ)“安心(τὸ τῆς φύσεως ἀγαθόν=ἀταραξία)落ち着き、靜謐、不動)”を取り逃がす(犠牲を拂ふ)ことになるが、その生き方がブレると、もとより聯中は“心本來の(動じない)ありやう(τὸ τῆς φύσεως οἰκεῖον=ἀταραξία)”に到るよすがとして、大船に乗つた氣であられる暮らしを切望したといふのに、(不評を買ふので)それは叶はないだらう。」諸家の譯文は“ἀσφάλεια”を「身の安全(security)」と讀むものばかりだが、文脈上は、いかがなものか。政治家ペリクレスの失脚や、パロス島遠征の失敗の咎でミルティアデス(エピクロスの父祖の一人?)に課せられた罰金50タラント、デーモステネースの追放と自刃を典型として、英名赫々たる聲望を得て財産や權勢に守られ「大船に乗つた氣で暮らす」有名人や金満家は「身の安全」を保障されるどころか、むしろ平等社會の通弊である「嫉妬・羨望」の餌食になりやすく、合唱隊費用負擔、體育行事費用負擔、三段橈船儀裝費用負擔、罰金、財産沒収、國外追放、處刑及び窮餘の自刃等に追い込まれる弊習があつたからである。重苦しく陰鬱な内亂の時代を生きたルクレティウスもその消息

を十分過ぎるほど熟知してゐて (Luc.5.1105-1135)、「・・・もし人が根據のある術理で生き方を律すれば、僅かなものに甘んじて心亂さぬ生き方が、人にはとてつもなく心豊かなそれになる・・・」(1117-1119)と斷じてゐる。あるいは、K.Δ.14「世間での (ἐξ ἄνθρωπων) 暮らしも、名聲と財力に守られるとそこそこは大船に乗つた氣 (τῆς ἀσφάλειας) でゐられるが、(心和やかで私慾なく行ひ正しい) 廉潔この上ない暮らしとは、心豊かに満されて多くを求めない、(神色自若とした) 地に足が着いたそれ (ἀσφάλεια) のことをいふ。」(τε ἐξερειστικῇ [Arrighetti] を読み、τινὶ ἐξοριστικῇ [Bailey] の補訂を読まない。) 一方、“ἀσφάλεια”の語は使はれてゐないが、Usener548, Bailey [Fr.B85] には、同主旨の Plut.de audiendis poetis,c.14 p37aの一節が収録されてゐる。「金満家であるとか、豪商、高位顯職の誰であれ、名望家であれ、(それだけで) 心が豊かになるわけでも、人に尊ばれるわけでもない (τὸ εὐδαιμον καὶ μακάριον οὐ・・・ἔχουσιν)。」むしろ悲苦痛のないこと、激しい惡意、惡感情を鎮めること、だから心がその非本來的なありやうを抑へて超へ出やうと對處することで、(人は) 心の豊かさや他の敬愛の念を勝ち得ることができる。」實際、エピクロス派の達人觀には、「最上限の、(神品の上々) さながら神の内實ともいふべき、(心が豊かに満された [悦びの]) 極致に達してゐる」(D.L.x.121a) 理想像がある。このやうに見ると、K.Δ.7等のアフォリズムはD.L.x.119の關聯句の根據にはならないやうに思はれる。

(因みに、K.Δ.14の直前のK.Δ.13にも“ἀσφάλεια”の語があり、やはり「身の安全」と譯されることが多いが、誤解ではなからうか。拙譯「天上の事情(神々?)も、地下のそれ(死後、冥府?)も、要するに人の經驗したことがなく(確かな)知識を持たない領域の事情に、恐ろしさゆゑに大いに不安が掻き立てられるが、その數々の不安が(拂拭されるどころか、)牢固として抜き難い通念(ἀσφάλειαν)

と化して世間に瀰漫するのは、愚の骨頂である。』)

(4)ディオゲネス・ラエルティオスの「北方希臘が常在戦場の修羅の巷と化した」時期の状況説明を具体的に補へば、多島海の制海権を掌握してゐたアテナイ海軍が壊滅したので、外敵は食糧輸入國アテナイの食糧供給（主食の小麦）を断ち、執拗な兵糧攻めでアテナイを陥落させた事態がある。前295年、小アジアを支配したデメトリオスが食糧輸送船を捕獲して船員たちを絞首刑にして、アテナイを完全包圍し市内を物價高騰を伴ふ深刻な飢餓状態に置いた時、エピクロスは社中を「庭園内で豆を糧食として養つ」(Plut.*Demetr.*34)て命を繋いだと、プルタルコスの傳へる逸話がある。エピクロスの「靜塾園」は果樹園でなく、菜園だつたのだらうか。當時、萬能藥草「パナケイア」( $\pi\alpha\nu\acute{\alpha}\kappa\epsilon\iota\alpha$ 、あるいは $\pi\alpha\nu\acute{\alpha}\kappa\eta$ )の根を用ひた煎じ藥が健康維持の常備藥とされたが、それは栽培されただらうか。註4(10)、11(11)、参照。因みに、アテナイは紀元後86年、ローマの將軍スッラに再び兵糧攻めで包圍され諸物價が急騰して舊に倍する飢餓状態に置かれた。市民たちは野草（夏白菊）を喰み、履き物のサンダルや革袋を煮て嚙るほど急迫し、累々たる悲惨な餓死者が出たといふ。(Plut.*Sul.*13-15) なほ、宗教上の信念からのピュタゴラスの奇妙な豆嫌ひは有名だが(D.L.viii.19,24,34,39)、ギリシア人の豆好き（そら豆、豌豆、はと豆、れんず豆、隠元などを使つた豆粥等）もよく知られ、Athena.ix.406C-408Bには豆料理自體が單なる乏しく貧しい代用食でないことを傳へる記事がある。ただ、小麦・大麦の輸入が途絶すると麴麴が作れず主食が摂れないが、その場合もスッラの兵糧攻めの方が、デメトリオスのそれよりも過酷だつたといふことである。

生きるも死ぬもアテナイと運命をとともにすると決めたエピクロスが、かうした「後繼者戦争」の渦中にほんの二、三度、イオーニア地方へ渡り（ミュティレーネ、ラムプサコスなどの）知音たちの許を周遊した折りの事情については、註4(8)、参照。この歴訪は、在ラムプサコス

の有力者イドメネウスやレオンテウスを中心とする、年毎の「分擔金」(σύνταξις, 120ドラクマ=1.2ムナ=36萬円弱?)を負擔する遠隔地のパトロン、関係者、知音各人たちとの交渉が目的だつたのではないかと、推測される。多作でも印稅収入のなかつたはずのエピクロスの遺産に、相當の「現金」の含まれてゐたことが分かるのは、そのためであらう。(cf. D.L.x.16-22, Arrighetti, pp.678-79) 註7(2)、參照。

- (5) アポッロドーロスは同名異人が多い。この一節のアポッロドーロスがエピクロス社中の「第一人者(庭園の獨裁者?)」その人かどうかは、嚴密に言ふと、不明である。この直接エピクロスを知らない社中の第五代目棟梁アポッロドーロスは前2世紀後半の人。註2(5)、參照。ディオゲネス・ラエルティオスの語法では、四百卷の著述をなしたといふ社中の「第一人者(庭園の獨裁者?)」アポッロドーロスを指す場合は、「エピクロス社中(ὁ ἑπικουρεῖος)」(D.L.x.25)あるいは著書名が指示される(D.L.i.58,60,vii.181)か、その二つが一緒に指定される(D.L.x.2)のが通例であるが、本アポッロドーロスについては、そのいづれもが明言されないからである。註解諸家は、本アポッロドーロスが「第一人者(庭園の獨裁者?)」であることを殆ど疑つてゐないが、Apelt校訂本に補註を附したK.Reich u. H.G.Zeklは『年代記』の著者「(アテーナイの)アポッロドーロス」(前2世紀前半[前180年頃出生]の人、前140年頃に壯年期を迎へた多方面に著述のある博識博搜の大學者。[註13(1)、參照。])と推定してゐる。(Diogenes Laertius X Buch:Epikur, S.131, Anm.29) この推定にも無理がないのは、このディオゲネス・ラエルティオスが少なくとも27回ほど援用する「(アテーナイの)アポッロドーロス」も社中の棟梁アポッロドーロスと同様、直接エピクロスを知らないながら、一統の過去や當代の内情に精通してゐたことが、D.L.x.13で言及されてゐるからである。のみならず、更に煩はしく厄介なのは、同名の兩者(建築家[アテーナイの]アポッロドーロスもまた)が同じ前2世紀後半に同じアテーナイで人生の盛期を送つてゐるからで

もある。

11(1)このカギ括弧の部分は、この破格のままでは文意が通じないことから、古註の挿入と推測され區別されることが多い。(Usener, *Epicurea*, S.xxvi) 古註の挿入と認めるのは、Usaener, Bailey, Arrighetti, Diano, Parente, Sammartano, Laksであり、認めないのが、Hicks, Apelt, Bignone, Kochalskyである。

『(哲學者) 便覧』第三卷の著者(マグネーシアの人) ディオクレース。前75年頃の人。このマグネーシアがイオーニア地方エフェソスの内陸部にある都市(Magnesia ad Maeandrum)か、リュディアのスムルナの内陸部にあるそれ(Magnesia ad Sipylum)のいずれかは、不明。ディオゲネス・ラエルティオスはこの學說史家ディオクレースを都合19回ほど引用してゐる。ニーチェは推測の域を超えて、大胆に「ラエルティオスは彼の書物を書き写した」とか、「ラエルティオスがディオクレスの書物以外のものから哲學者たちの異見を採ったとは認められない」、「最も簡潔に言えば、ラエルティオスはディオクレスの抄録(Ἐπιτομή)なのである」(『ディオクレスの資料としてのデメトリオス』『古典ギリシアの精神』、ニーチェ全集1、220, 221, 226頁。)と誇張を交へて斷言してゐる。註1(4)、參照。ただし、D.L.x.4で言及される『哲學者便覧(Ἐπιδρόμη τῶν φιλοσόφων)』の著者マグネーシアの人ディオクレオス(Διοκλεῖος)と本節のディオクレース(Διοκλήs)は同一人物なのかどうか。

本節には「靜塾園は大枚八十ムナを投じてエピクロスが購つたもの」とあるだけで、その「庭園」像は自明だと言はんばかりに、具體的な説明がない。

Suid. <κῆπος>によると、原語には「庭園」の他に、二種類の意味のあつたことが分かる。一つは「芥子坊主(椀形に毛を剃り残した髪形で、若衆奴隸の剃り形[アリストファネス/高津春繁譯註『鳥』(807行)、古典世界文学12、筑摩書房、昭和51年、222, 246頁])の意で、も



う一つはボスフォラス海峡附近にあつたボリスの名である。アテナイでは、殊に著しく刈り込んだかうした短髪は自由市民より奴隷に相應しい髪形とされ、髪と鬚を適度に蓄へる（鬚剃りは自由、口鬚だけを残すのは野蠻とされた）のが普通で、刈り込まない長髪と鬚は哲學者たちの別の徴だつた。アレクサンドロス王のやうな顔剃の慣習はマケドニア侵攻以後持ち込まれた。ストア派やキニコス（犬儒）派は敢へて流行輕侮の意圖から、短髪を採用したといふ。

さて、本  $\kappa\eta\pi\sigma$  は無論、「田園好き」（D.L.x.120a）のエピクロスの「庭園」の意で、エピクロスが市域内メリテ區に私邸を構へる一方で、市域北北西のディピュロン（二重）門を出て、巨大な墓地の道の左右に石墓碑が林立する、郊外のアカデーメΙΑ學苑への途次にある、市域を少しはずれたケラメイコス（墓地）外區（二區あるうちの内區はディピュロン門内の市域にあつた）に修養場として、八十ムナで購入したものである。ディピュロン門から進んで6スタディオン（約1.5キロ）でアカデーメΙΑ神域に達する散策の途次、キケロが「今し方通り過ぎて來たばかりのエピクロスの學園・・・」（Cic.de Fin.v.3）と述べた記録なども含めて、復原された地勢繪圖は、J.Travlos, *Pictorial Dictionary of Ancient Athens*, HackerArt Books, New York, 1980, p.45 fig.13, pp.299-322, Long & Sedley, *The Hellenistic Philosophers*, vol.1, p.4（作畫Cadice H.Smith, 1987）、廣川洋一『プラトンの學園 アカデーメΙΑ』、21頁、図1、參照。外は常在戦場の亂世にあつて、エピクロスは内で私財を投じ命懸けで作「庭」（果樹園か、菜園か？藥草  $\pi\alpha\nu\acute{\alpha}\kappa\epsilon\iota\alpha$  [あるひは  $\pi\alpha\nu\acute{\alpha}\kappa\eta$ ] はなかつたか？）に勤しみ、「その心術の忠實な鏡たる心の澄んだ暮らし」（Sammartano, *Epicuro*, pp.101f.n.18）を確立し維持するために、その盤石な護持に執心した。その發掘の報告書は、ΓΕΩΡΓΙΟΣ ΔΟΝΤΑΣ, “ΕΙΚΟΝΙΣΤΙΚΑ Β”, ΑΡΧΑΙΟΛΟΓΙΚΟΝ ΔΕΛΤΙΟΝ 26 (1971), pp.16-33を參照。

戸外での公私の用務に忙殺されたギリシア人にとって、市域内の狭い

家とはそもそも最低限の衣食住と夜の宴會用の建物であつて、大家屋は田園に求めざるを得なかつた。雨量も少なく僅かな天然泉水と井戸水を除けば泥河ばかりで、「庭園」の發達しやうのないギリシアでも、富裕層は兩の家屋を兼有し、泉が湧き果樹がたわわに繁る「アルキノオスの園」(Hom.Odyss.vii.112-132)を理想としたか否かは判然としないが、市域内の小家屋に私有の「庭」を作る一方で、好んで田園の大家屋に住むのが一般だつた。プリニウス(Plini.Hist.xix)は、この種の「庭園」を市域に設けたのはエピクロスを以て嚆矢とするとしたが、イサイオス(Isaios,v.10-11)によると、ディカイオゲネースがテオボムボスの家を購つた後、壊した址に最初の市域内の私有の「庭」を造つたといふ。私産あるいはパトロンの支援によつて、プラトーン(D.L.iii.5[コロノスの丘近くにある私邸としての小園])もエピクロス(D.L.x.17[メリテ區の家屋敷])も私邸の他に、「庭園」を所有しうるほどに裕福ではあつたのである。註2(2)、4(8)、8(2)、參照。

Senec.Ep.21.10 (Usener181)「あなたがその(エピクロスの)小園に行つて、『客人よ、心ゆくまでここに留まれよ、ここでは悦びがこの上ない恵みゆゑ』と刻まれた銘文に目を留めると、客人を厚くもてなすことを心得た、その住居を束ねてゐる親切な人(エピクロス)が(姿を現はし)、あなたに麵麴(polenta)を振る舞ふばかりか、水もたつぷり勧めてかう言ふだらう。『ご堪能頂けましたか。』そしてかう續けるだらう、『寓園の麵麴や水は意地汚ひ慾を掻き立てず、むしろ鎮めます。そればかりか、もつと何かを飲みたいといふ慾も封じて渴きを潤し、人本來のありやうへと戻す癒しを無償で與へます。この(枯れて倒れない)悦びの虜になつて、わたしは齒ひを重ねて來たのです。』

D.L.x.11「小甕分(約1/5リットル)の(水で割つた)薄い葡萄酒すらこの一統は退けて、飲料は水だけとすることに徹してゐた。・・・エピクロスは私信で幾度もかう告げてゐる。『(飲み物は)水だけでわたしは結構、(食べ物も)粗末な麵麴(ᾶρον)一塊りで事足ります』

と。」「水 ( $\nu\delta\omega\rho$ )」については、註11(3)、参照。米 ( $\sigma\rho\nu\zeta\alpha$ ) は一般に薬用として少量使はれるに留まつた。穀物粉 (大麦粉が主で、小麦粉は貴重品) はすべて粥 (固めのスープで、日本の蕎麦掻き様のもの)、捏ね粉、菓子、麵麴の原料となつた。そのうち麵麴 “アルトス” は小麦か大麦に葡萄酒を混せて酵母を入れた發酵麵麴で、多種多様な大麦粥マーザ ( $\mu\hat{\alpha}\zeta\alpha$ ) に次ぐ主食。朝食と昼食用の大麦粥マーザが上等になると円形、平形の麵麴状になつて、“アルトス” に近づく。“アルトス” は市場アゴラの麵麴屋 (市場の露店や商店での賣子の叫び聲は喧しく、口達者で有名なのが魚屋の女で、麵麴賣り女の口汚さもそれに劣らなかつたらしい。Aristopha.Ves.c.1390-1412) で買うのが通例だったが、各家庭で作られることもあり、錢葵、レタス、キャベツ、空豆、レンズ豆などを附野菜とするのが一般的だつた。料理はどれも、今で言ふナイフやフォークの類を用ひず、素手で掴んで食べた。エピクロスはどうしたのであらう。その言葉を信じるならば、エピクロスが普段食べてゐたのは、後代まで下層貧民が常食とした大麦粥マーザより上等な夕餐 [正餐] 用の “アルトス” の方だつたのではないか。朝食用に「葡萄酒に浸して食べた麵麴」と誌されることの多い、古代ギリシアの大麦粥マーザは、澱の残る葡萄酒を混せて作つたので (ギリシア人は棗椰子酒と麦酒を野蠻人の飲み物として喜ばなかつた)、普段は水しか飲まないエピクロスが大麦粥マーザを食したとは考へられない。(ところが、D.L.x.131 [Ep.ad.Menoe] には「誰であれ空腹時に麵麴 [マーザ  $\mu\hat{\alpha}\zeta\alpha$ ] と水 [ $\nu\delta\omega\rho$ ] を攝ると、それが最高の “快” を與へてくれる」といふエピクロスの言葉があり、D.L.x.15には、歿時のエピクロスは例外的に「生のままの葡萄酒を所望して一氣に仰」つたとある。) 有力者の援助や支援者の「分擔金」を得て、80ムナの「庭園」を購つたエピクロスは「清貧」どころか、むしろ裕福で、日没の頃、夕餐 (正餐) を認めた後に「夜會の指南」(D.L.x.6) を勸行したものか。一方、セネカの言ふ “ボレント” はギリシア人の食べた “アルトス” ではなく大麦粥マ

ーザに当たり、「蜂蜜と酢を入れるもの、酢を水で薄めて入れるもの、蜂蜜と水とを入れるもの、水だけ入れるもの、家畜の乳を入れるものなどバラエティーに富んでいた。掻きまわしたり、こねたりすれば、それででき上がりで、火であたためたどうかもはっきりしない食べ物であった。こねたらすぐ食べることもあれば、長時間おいて、混ぜた液体がよく沁みて柔らかくなってから食べることもあった。」“アルトス”は火を通して香ばしく焼き上げる麺麴ではなかつたやうである。(塚田孝雄『シーザーの晩餐』、朝日文庫、1996年、72-73頁。同『ソクラテスの最後の晩餐』、筑摩書房、2004年、14-16頁。)

Plut.adv.Ep.beat.1097C (Usener183,Arrighetti[99],Bailey.Fr.B40)「水火も辭さぬ直向きさで、あなた方はわたしが麺麴(大麦、小麦を原料とする穀物麺麴で、ここでは殆ど“アルトス”と同義)に事缺いて缺食する窮狀に陥らないやうに、盡瘁してくれました。そして、わたしに對する懇情の、この世のものとも思へない證しもふんだんに示してくれました。」この「證し」の中には、重大な年毎の「分擔金(σύνταξις)」の件も含まれてゐたかも知れない。[cf.Usener184,Arrighetti[121],Bailey.Fr.B 41.註4(9)、5(3)、參照。]

Ioann. Stob.III,XVII,33,H. (Usener181,Arrighetti[124],Bailey, Fr.B37)「わたし(エピクロス)は水と麺麴を頂くことで、體が枯れて倒れない悦びを滿喫してゐて、贅を盡した享樂三昧を唾棄する。さうした楽しみ自體がではなくて、むしろ享樂の後に必づ不快や厄介事が待ち受けてゐることが問題だからだ。」享樂の果てに待つのは、性愛と飽食の快樂の刻む疲勞と徒勞以外のものではないのだらう。

なほ、かうした暮らしぶりは、エピクロス派だけの特徵ではなかつた。キュニコス派のシノペのディオゲネースの「粗食で、水を飲みものとする」、エピクロスとその一統に似た暮らしぶりについては、D.L.vi.31、參照。また、ストア派ゼノーンの「一片の麺麴と、乾し無花果を食し、水しか飲まない」暮らしぶりについては、D.L.vii.27、參照。ピュ

タゴラス派の「豆を控へて、野菜を食べ、水しか飲まない」教團生活については、D.L.viii.24,34,38,45、参照。しかも、Athena.161B-Cでは、僅かな食物と垢じみて汚れて異様な臭氣を發し、寒さと沈黙でふくれ面が特徴のピュタゴラス派についてかう言はれてゐる。「毎日食うものときたら、混じりけなしのパンがひとりに一個ずつ、水をコップに一杯。それだけだ。/監獄の献立だな。賢人ていうのはみんなそんな暮らしをして、そんな難儀をしているのかな。/これでもほかに比べりゃ食つてる方だ。・・・五日にいっぺんだけ、コップ一杯かそこらの大麦粥をすするだけ」(柳沼重剛訳)のピュタゴラス派の聯中もゐたといふのである。エピクロス及びエピクロス一統の暮らしぶりは、それほど極端でなく、「中心」(アテナイ人の暮らしは質素を旨とした)から僅かに「ずれて」ゐただけであらう。

- (2)エピクロス自身とその一統が「その心術の忠實な鏡たる心の澄んだ暮らし」(Sammartano, *Epicuro*, pp.101f.n.18)を自前で営みながら、相互扶助を行つてゐた事情は、エピクロスの遺書に詳しい。(D.L.x.17-22)「暮らしは低く、思ひは高く (“plain living and high thinking”. W.Wordsworth)」が聯想されるが、エピクロスとその一統では、各自が「純一無雜に心を澄まして、なにものにも煩はされない自由と自在(悦び)を生きる不可分割素」として自立し、他の自立を促しつつ、「第二の自分」たる社中、知音を扶助し交流する場が、目的もなく中心もないからしなやかで、無慾恬澹な心の動じない、はずれ者の集ふ「庭園」だつたのではないか。「庭園」といふ場そのもののもつ意義は大きい。衣食が足りないからこそ、氣高く廉潔に生きられるとする美學は、「求める」と、求めたものに制約され縛られて、自由と自在(悦び)を失うといふのであらう。

“εὐτελέστατα καὶ λιτότατα” 「一切無駄遣ひをせず、贅を削ぎ落として極限まで簡素化した(無慾恬澹な)暮らしを」。

既存譯では、同義語を重ねた句の扱ひをすることが多いやうに思はれる

が、拙譯では譯し分けた。特に “λιτότατα” の含意は、「安物  
買ひに徹する」ではなく、むしろ「いいものをほんの少し」であらう。

- (3)「小甕一つ分（約 1/5 リットル）の（水で割った）薄い葡萄酒すらこの一統は退けた」。

「小甕分（1 コテュレ）」とは、鑛泉を賣る際の水量の単位（Athena.42B）であると同時に、食と飲の分離の下、食事後の「酒盛り」で葡萄酒を最初に飲み回す際の小盃の大きさだつたらしい。（ibid.420A）宴酣ともなれば、大盃も出た。

ギリシア人は、キオス産やレスボス産のそののやうな、上等で濃い「生のままの」と形容した葡萄酒を酒盛りで飲むのは野蠻人のやうに禮を失した、教養人にあるまじき不作法とした。澀の多い安酒は木灰で澄まし、混酒器で松脂や海水などの防腐剤入りの葡萄酒を水の多い割合で薄い水割（湯、冷水、夏場は雪で割るが、蜂蜜、香料を混ぜることもあつた。薄め過ぎると、「蛙の飲み物」と言はれた。）にしてから飲むのが慣習になつたのは、一般に酒そのものは過ぎれば心身に有害と觀念されてゐたからである。「一（の盃）は健康のため、・・・二は愛と快樂のため、三は眠りのため。賢者と呼ばれる者は、この三つめを飲んで家に帰る。四つめの甕（盃）など用はない。それは厚かましい者が飲む。五つめは喚くやつばら、六つめは乱痴氣騒ぎ用、七つめで目の下に隈ができ、八つめで裁判所行き、九つめは怒気を荒げ、十で気が狂って物をぶん投げる。」（Athena,36B-C）新アカデーメシア派學頭ラキュデース（前242年-前216年頃）は、「底抜け上戸で中風になつて死んだ。」（D.L.iv.61）一方、ヒポクラテースは、幼児（男兒のみ。女兒には別處方）の膀胱結石に「葡萄酒をごく薄くうすめて与える」（「空氣、水、場所について」、「古い醫術について」、小川政恭訳、岩波文庫、19頁。）治療法を勧めてゐる。

哲學者たちは葡萄酒を「狂ひ水」、「致死の水」と觀念してゐることが多い。高齢のメガラ問答派スティルポーン〔註9(10)、參照。〕は、老ひ

と病氣を克服する唯一の手立てとして、「(生のままの?) 葡萄酒を飲んで、死期を早めた」(D.L.ii.120) といふ。中期アカデーメシア派始祖アルケシラオス(前318-前242年頃)は、「生のままの葡萄酒を浴びるほど飲んで狂つて死んだ」(D.L.iv.44) といふ。エピクロスもまた、「不歸の客となつた。なんと、熱い湯を使つたあとに生のままの葡萄酒を呷つたかと思ふと、死の冷氣をも一息に飲み干して。」(D.L.x.16)

葡萄酒に「薬としての」効用も認めながら(Plat.Leg.666B[頑なな老ひの備へ],666C[憂ひを忘れさせる],672D[魂に慎みを、體に強さと健康を與へる])、プラトーンが酩酊をひどく嫌つたことは有名である。そのPlat.Philb61C “τὴν δὲ τῆς φρονήσεως νηφά-  
ντικὴν καὶ οἶνον (思慮といふ泉は素面の、酒ぬきの[正氣の] 泉) は、エピクロスの「心の嵐」(D.L.x.128.τὴν τῆς ψυχῆς ἀτασθαλίαν=ο τῆς ψυχῆς χειμῶν) を鎮めて「心の風」(D.L.x.83.πρὸς γαλήνην ισομόν) を齎す「素面の(醒めて) 名指する精神のまなざし[内言語、語彙力]」(D.L.x.132.νῆφων λογισμός) と奇しくも發想が一致してゐる。

なほ、ブルータルコスが、飲酒と體の溫冷化に關してエピクロスの遺した言葉を傳へてゐる。Plut.adv.Col.1109E(Usener58,Arrighetti[21.1],Bailey,Fr.B5),1109F(Usener59,Arrighetti[21.2],Bailey,Fr.B6),1110A(Usener60,Arrighetti[21.3],Bailey,Fr.B7),Plut.quaest.conuiu.652A(Usener60) 例によつて、信憑性には疑問が残る。

ギリシア人は紅茶も珈琲も知らず、棗椰子酒と麦酒を知つてゐても野蠻人の飲料として喜ばず、水か葡萄酒しか飲まなかつた。ヒポクラテースは、飲料水として「湧水(天然泉水)」、「雨水」、「雪融の水」の三種を擧げてゐるが(「空氣、水、場所について」、14-18頁。)、(水で割つた) 薄い僅かな葡萄酒すら斷つたエピクロスと社中はどんな「水(ὕδωρ)」

を普段の唯一の飲料としてゐたのか。エピクロスの死病〔現在の醫學では、難病・奇病の類ではなく、よくある病気の一つとされる。註15(3)、参照。〕が「(水腫を伴ふ?) 尿石による尿閉 (と尿毒症)」であり、ヒポクラテースが水と健康の關はりを重視して「水腫」を觀察してゐる以上、どんな「水」が飲まれたのかと思ふ。まず、川水は一般に泥流だから、アテーナイ市域北側を流れ、ケラメイコス内區を走り、エピクロスの「庭園」近傍にあるエーリダノス川のそれも、市域東南側を流れるイリソス川 (Plat. Phaidr. 230B-D. 河畔が鬱蒼とした涼しい叢林になつてゐて、ソークラテースの對話する「憩ひの場」) のそれも、アカデーメイア神域の背後を流れるケフィソス川のそれも、樹木は潤しても、飲むことができない。「ギリシア人は導水管を埋設して、湖や川ではなく、山の湧水を引いた。……ギリシアでは(泥)川に妖精はゐないのだ。地中海沿岸一帯の河が濁つた泥流だといふのは、見掛けより遙かに重要な事實である。」(A. Zimmern, *The Greek Commonwealth*, 5th ed. (revised), Oxford U.P., 1947, p. 42) 當時の給水設備には二種、公共の給水と各家庭の自給水があつた。公共の給水はヒメテース山や、イリソス川とオリュンボスの聖域社の間にある大天然泉カリッロエー (Καλλιρρόη) を給水源とする公共泉水で、各家庭には引かれなかつた。家庭の自給水は自家掘りの井戸水か、公共泉水から男衆か奴隸が大甕で汲んで運び、貯水甕に蓄へる湧水しかなかつた。ことにアテーナイは、常に埃つばさと給水不足で知られた街だつた。ヒポクラテースは、高地及び丘陵地から引く「湧水(天然泉水)」を最良とし、「雪融の水」を有害としてゐるし、プラトーンのアカデーメイア學園内には「清き」泉の湧いてゐたことが知られるので (D.L.v. 11, Sophoc. O.C. 691)、エピクロスの場合も、汲んで歸つて貯水甕に蓄へた公共泉水か、あるいは「庭園」内に湧く泉水、あるいは掘つた井戸の水を一統の飲料水としたのではないか。夏場には降らない雨水の貯水についてははっきりしない。公共泉水を汲んで利用したのならば、「門前市をなす販ひの」社中に供するに



は、自家給水は不十分な量の割には、日毎の相當な重労働だつたはずである。

なほ、飲めない川水は、海水と同様に花嫁の形ばかりの沐浴に用ひられた。

しかし、飲料は水だけとしたのは、エピクロス及びエピクロス一統だけではなく、キュニコス派のシノペのディオゲネース、ストア派ゼーノーン、ピュタゴラス派もまた同様だつた。最後の辯論家で、「水を飲み、夜思索する」(ibid.44F)と稱されたデモステーネスも素面の堅物だつた。「萬物の中で最善のもの、水」(ピンダロス)を多角的に論じた噓矢と自負するアテーナイオスの、ヒポクラテース文書にも目配りした「水論」の詳細は、Athena.40F-47A、参照。注目すべきは、葡萄酒をも水で割る慣習のあるギリシア人にして、幼児から、そして生涯飲料は水しか飲まない人が結構ゐること (ibid.40F,44B-45A)、及び水しか飲まない奴にも「盆暗」がゐると言はれること (ibid.44A)、であらう。つまり、ギリシア人に飲料は水か葡萄酒かの二者擇一だつたにせよ、「水しか飲まない人々」がさして秀抜でも、異様でも、例外的でもなかつたことである。少し中心から「ずれて」ゐるだけである。

- (4) “τὸν τε Ἐπίκουρον μὲν . . . τὰς οὐσίας, κα-  
θ’ ἅπερ τὸν Πυθαγόραν . . . οὐδὲ φίλων” 本  
節の読みは難しい。諸家はいずれも本節中の “τὰς οὐσίας” を  
ピュタゴラス派の所謂「共產主義 (友のものはおれ [みな] のもの)」  
と關はらせて、「財産、家財、資産、所有物 (belongings, property,  
Enizelvermögen, Güter, ses richesses, gli averi, i beni, i loro averi)」と讀  
んでゐるが、拙譯では、文脈上から「社中各々の生活の仕方、暮らしぶ  
り」と解する。「さりとて、エピクロスは一統各々に暮らしの規律の一  
本化を求めず、ピュタゴラスの所謂 “友のものはおれ [みな] のもの”  
といふ (利己主義と惡平等の) 手口を斷固退けた。といふのも、(社中  
の) 名ばかりで心ここにはかうした規律の一本化も意味はあ

らうが、もとよりそれは（衣食足りないからこそ、氣高く廉潔に生きる  
といふ、自分なりの）生き方の美學をもつ社中のすることではないし、  
（エピクロスの）知音たちのすべきことでもないからである。」

ピュタゴラスの格率とされる “ $\kappa\omicron\iota\nu\acute{\alpha}\tau\grave{\alpha}\phi\acute{\iota}\lambda\omega\nu$ （友の  
ものはおれ [みな] のもの）” は本節だけでなく、D.L.viii.10にも現はれる。  
「ティマイオスによると、友のものはみな [おれ] のもの（ $\kappa\omicron\iota\nu\acute{\alpha}\tau\grave{\alpha}\phi\acute{\iota}\lambda\omega\nu$ ）、友情とは平等に分け合ふことと、最初に語つたのが  
ピュタゴラスで、だからその弟子たちは、私財（ $\tau\grave{\alpha}\varsigma\omicron\upsilon\sigma\acute{\iota}\alpha\varsigma$ ）  
を供託して一つに纏めてゐたといふ。」（D.L.viii.35には同主旨の言葉が  
傳へられてゐる。「（ピュタゴラスは、）麵麴（アルトス）を切れ切れに  
割いてはならない、嘗ては友といへば、一つの麵麴の下に集つた者たち  
のことだつたから・・・だから友を引き寄せ結び合はせてゐる麵麴を引  
き裂いてはならないとも言つてゐた。」）Plat.Lys.207C,Rep.424A,  
449C,Leg.739Cには “ $\kappa\omicron\iota\nu\acute{\alpha}\tau\grave{\alpha}\tau\omega\nu\phi\acute{\iota}\lambda\omega\nu$ ” の表現が頻  
出する。（ $\kappa\omicron\iota\nu\acute{\alpha}\tau\omega\nu\phi\acute{\iota}\lambda\omega\nu$ も使はれる。）無論、プラト  
ーンが魂の淨化と不死に最も役立つ公平無私の學問（純粹數學）に携はる  
教團生活を「ピュタゴラス的生き方」（Plat.Rep.600B）と呼んだやうに、  
男女平等の参加資格を含むピュタゴラスの格率は私財の共產化だけでな  
く、生活の規律化にも學問的發見の集團匿名化（ピュタゴラス歿後もピ  
ュタゴラスに歸因するとされた）にも適用された。系譜として聯なり、  
學派名に始祖の名が附され、常に始祖への歸依と回歸が求められ、質素  
な生活を送つた點は共通してゐるにもかかはらず、エピクロスはピュタ  
ゴラスの格率を斥けた。一方、ディオゲネス・ラエルティオスはピュタ  
ゴラスの格率とまったく同じ表現で、「極めて強い利己心（ $\phi\acute{\iota}\lambda\alpha\rho\tau\omicron\varsigma$ ）」の發露として、ポリュステネスの人ピオンの準則でもあつた  
と傳へてゐる。（D.L.iv.53）キケロもまた誤解しつつこの點について證  
言してゐる。「君（トレパーティウス）はエピクロス派になつた  
由。・・・萬事自分の快樂を尺度に判斷する人々の許では、共有（公共）

資産はありえない……。」(Cic.*Ep.ad fam.*vii.12 [Usener543]) 遙か後世に、エピクロスやルクレティウスにこよなき共感を寄せたアナトー・フランスの、「万人の平等」を謳ひ文句にしたフランス革命観も同様である。「万人の幸福と正義の治世との到来を準備すると見せかけて、財産の平等と共有とは市民がその実現を目指して努力するにふさわしいことであると提言していた者たちは、実は……危険な叛逆者であり極悪人であったのだ。」(『神々は渴く』、大塚幸男訳、岩波文庫、1983年、194-195頁。)

古註によると、ピュタゴラスの格率は元々人間の「雅量」を説き勧めた言葉で、全希臘世界に分立するポリス割據の解消を求める比喩だつたといふ。(古註の原文は、田中美知太郎・藤澤令夫『プラトン著作集・パイドロス』、岩波書店、昭和32年、研究用註、161頁、参照。)

- (5)この「麵麴 ( $\acute{\alpha}\rho\tau\omicron\varsigma$ )」については、註11(1)、参照。「水 ( $\acute{\upsilon}\delta\omega\rho$ )」については、註11(3)、参照。なほ、極限まで簡素化された食べ物とその効用に関して、ストバエウス (Ioannes Stobaeus, *Floril.*xvii.14, Usener135a [S.345], Arrighetti [58], Bailey, Fr.B29) が傳へ、よく引かれるエピクロスの言葉がある。「わたしが何ものにもとらはれない自由 ( $\tau\grave{\eta}\nu\acute{\alpha}\nu\tau\acute{\alpha}\rho\kappa\epsilon\iota\alpha\nu$ ) を稱へたのは、無駄遣ひをしない贅を削いだ簡素なこだはり生活 ( $\epsilon\acute{\upsilon}\tau\epsilon\lambda\acute{\epsilon}\sigma\iota\kappa\alpha\grave{\iota}\lambda\iota\tau\omicron\iota\varsigma$  [cf.D.L.x.11.註11(2)]) を嚴守するためでなく、簡素はもとより、恐れや不安を抱かない生活を送るためだつた。」一方、D.L.x.130「わたし(エピクロス)が、何ものにもとらはれない自由 ( $\tau\grave{\eta}\nu\acute{\alpha}\nu\tau\acute{\alpha}\rho\kappa\epsilon\iota\alpha\nu$ ) を快適至極だと思ふのは、さう思へば自分がどんな場合も僅かな手立てで暮らすことに慣れるからでなく、自分がさして裕福ではない以上、僅かな手立ての暮らしに満足するためなのです。」
- (6)「乾酪を……誰かに持たせて寄越して[送り届けて]くれませんか、小壺ひとつ分」( $\tau\upsilon\rho\omicron\upsilon\kappa\upsilon\theta\rho\acute{\iota}\delta\iota\omicron\nu$  [ $\chi\upsilon\tau\rho\acute{\iota}\delta\iota\omicron\nu$  のイオーニア方言] .Arrighetti) と底本を譯した一節には、テキストの

異同が三種ある。“ $\tau \upsilon \rho \omicron \hat{\upsilon} \kappa \upsilon \theta \rho \acute{\iota} \delta \iota \omicron \upsilon$  (Usener, Bailey, Diano, Apelt, Long, Laks, Hicks)”を採る場合、この圧倒的に支持されるテキスト「小壺に詰めた乾酪」の屬格形をどう讀めばよいのか。 $\kappa \upsilon \theta \nu \iota \omicron \upsilon$  (Menagius) を讀むのは更に難しい。

「乾酪 ( $\tau \acute{\upsilon} \rho \omicron \varsigma$ )」は、雨量が少なく、花崗岩質の山が国土の八割を占める農耕に適さないギリシアの山野に放牧された牛、山羊、羊、猪などの内、役牛として使はれた牛を除いて、山羊乳と羊乳が幼稚な製造法で粗製された乳食品である。牛乳は體に害があるとして飲まれなかつた。ヒポクラテースは、乾酪も大量に摂取すると腹痛を起こす有害な食品だといふ俗説を反駁して、その有害と強健の効能は人それぞれだと論じてゐる。(Hippoc.  $\pi \epsilon \rho . \alpha \rho \chi . \iota \eta \tau \rho$ . 20) 實際、乾酪や乳漿は、既にホメーロスで、男には戰士の剛勇を、女にはたおやかな美と智を養う源として言及されてゐる。(Hom. *Il.* xi. 638 seqq, *Od.* vi. 76 seqq, ix. 216 seqq, xvii. 217 seqq, xx. 61 seqq) Aristoph. *Ves.* 891-940には、貴重品だつたシケリア製乾酪の盗み喰ひで告訴される話が語られてゐる。乾酪は、戰士が大蒜や玉葱、無花果の葉で包んだ塩漬け魚とともに必須の携帯食(三日分の糧食)として自辯したが、普段はそのままで食べられることが殆どなく、さまざまな料理や粥、菓子、麵麴などの他食品に混ぜ合はせたり、捏り込んだりして食用に供された。「大蒜、乾酪、玉葱、ふうちょう草で、しめてードラクマ」(Athena. 161D)の食費と言はれてゐるし、ピュタゴラス派の貧しい子供へ物の一つに「乾酪」が挙げられ、皮肉られてゐるので (ibid. 161D)、乾酪は滋養(味不明)豊かであつても、戰士の自辯力を超へる、金満家用の特に高價な高級食品といふわけではなかつたと思はれる。「水と麵麴“アルトス”」だけで事足りてゐたエピクロスも「心が動く時いつでも豪勢な御馳走に與る」趣向で、おそらく「庭園」自家製の麵麴“アルトス”に乾酪を捏り込んで食したのではないか。市場の麵麴屋で買つた既製の麵麴では、乾酪の捏り込みはできなかつたであらう。エピクロスの言葉を信じれば、乾酪を他の料理に

混ぜ合はせる贅澤もしなかつたであらう。エピクロスには乾酪は有害でなく、強健の効能を發揮したもののか。(因みに、朝廷中心に貴族階層の獨占食品だつた、大陸傳來の上代日本最古の乳製品「酥(蘇)」が作られたのは紀元700年(文武天皇時)。山羊乳や羊乳でなく、[ギリシア人には有害と觀念された]牛乳を加熱濃縮して十分の一まで水分を抜いたその酥の味を「醍醐味(微妙第一)」[最高の味]といつた。鍋田文三郎『チーズのきた話』、河出書房新社、1991年。)

それにしても、奇妙なことにギリシア「食通大全」とも言ふべき膨大な巻本を著したかのアテナイオスには、片語の言及はあつても、なぜか乾酪に関する纏まつた記事がない。(『食卓の賢人たち』全13卷)

なほ、クセノフォンに、エピクロスの手翰中の「送り届ける(πεμνω)」の語を用いた次の一節がある。Xen.Anab.1.9.25-26「(ペルシア王)キュロスは特別に旨い葡萄酒を手に入れると、既に半分空けた酒壺を友人に届けさせることが珍しくなかった。その時の伝言は、『このところ久しくこれより旨い葡萄酒に出会ったことがない。それを君にお届けするから、今日は君の一番の親友たちと共に飲んで空けて欲しい』というのである。また食いさしの鷺鳥の肉とか、パンの半切れとかの類いを届けさせることもよくあつた。使いの者に持たせてやり、次のような口上を伝えさせる。『これはキュロスが食べて旨かつたものである。そこで君にも賞味してもらいたいと思う。』」(松平千秋訳)

- (7) “ $\overset{\epsilon}{\eta} \delta \omicron \nu \overset{\iota}{\eta}$ ” は「絶対的」と「相對的」の二種が區別されてゐるが(D.L.x.121a)、“ $\overset{2}{\alpha} \tau \alpha \rho \alpha \xi \overset{\iota}{\alpha}$ ” (D.L.x.82,85,96,128)、“ $\overset{2}{\alpha} \upsilon \tau \acute{\alpha} \rho - \kappa \epsilon \iota \alpha$ ” (D.L.x.130, Usener 135a [S.345], Arrighetti [58], Bailey, Fr.B29, Bailey, Fr.A.77 「 $\alpha \upsilon \tau \alpha \rho \kappa \epsilon \iota \alpha$ の最大の果實が自由である。』)と“ $\overset{2}{\epsilon} \upsilon \delta \alpha \iota \mu \omicron \nu \overset{\iota}{\alpha}$ ” (D.L.x.116,121)、“ $\epsilon \upsilon \delta \alpha \overset{\iota}{\iota} - \mu \omega \nu$ ” (D.L.x.118) とほぼ同義だが、正確に意味を解するのは難しい。拙譯では“ $\overset{\epsilon}{\eta} \delta \omicron \nu \overset{\iota}{\eta}$ ” は「心が澄んで動じない自在(悦び)の境地」と、“ $\overset{2}{\alpha} \tau \alpha \rho \alpha \xi \overset{\iota}{\alpha}$ ” は「なにものにも煩はされない自由(悦び)」

の境地」と解してゐる。「否定と欠如」の接頭辭“α-”はエピクロスの場合は、「中心や、中心の視點、視座を“逸れる”、“外れる”」はぐれ雲 (clinamen) の美學・美意識を含むやうに思はれる。當然、それは不可分割素論と一體で考へねばならないし、“παρεκλίσις” (clinamen、ゆらぎ)”の語は傳存するエピクロスのテキストにはないが (ルクレティウスが傳へてゐる。Lucre.2.243-283.註4(7)、参照。)、 “α-”は“ταράξις, ταράγμός”といふ「中心」から絶へず「はぐれる」の意があるのではないか。“ἡ δὲ οὐκ ἔστιν ἡ”論の詳細は、D.L.ii.87,x.34,121b,128-132また K.Δ.3,4,5, 8,9,10,18,19,20,21等にある。

(8) *Anth.Pal*.iv,43